神通自在靈狐使用口傳 全

始

序

我國には古來より憑依の信仰があつて、其遺弊は今日に於ても依然として迷夢に醉されて居るものが多い、彼の天狗憑、狐憑、犬神憑、飯綱憑、蛇靈憑等がそれである、然して是等の傳說は盛んに行はれて居るが、未だ靈狐の使ひ方を說き示した者は一人もない樣である。

神官や坊さん達が人心を迷はせ人世の向上を妨げるやうな、僞瞞的著述を振りまわして、人間の心靈以外に一個體の神靈が別個に活躍して居て、之れが人間に乘り移つて、神古とか、豫言とかを行ふものと說き、愚夫愚婦を迷はせ來つたのである。

これがため日本全國には外國にその現象を見られざる程の稻荷神社があつて、座食空談の神官僧侶を生活さして居るではないか、是等憑依の信仰は、意識的に又は無意識的に其人々の心に浸染して、何等かの機會に於て益々其信仰は强烈となり、其人格

を變換して全然別人の如き言動を敢てする樣になるのである、之を憑依と誤信して居るが、それは憑依ではなく實際は心の作用である。

靈狐と云ふのは心に潜んで居る意識や、心の外に顯はれて居る意識等の凡てを使ひ、靈の本體を活躍させる前人未發の不可思議な……否な絶妙な靈の働らきである、人の病氣を治すとか、人の心を讀むとか、商況を先見するとか云ふ樣な問題は、實に小なる問題であつて能く靈狐を使へば惡人を善化させる權威を有するのである、故に迷はされたる古來の風習を打破して、眞に靈狐の權威を示すべく、玆に空前の公開をするのであるから、此の機に於て讀者は熱心研究心得せられて、其期待を全ふせられんことを。

大觀しるす

神通自在 靈狐使用の口傳 目次

一、緒　言……一
二、靈狐とは何ぞや……一〇
三、狐の種類と荼枳尼天……一七
四、稻荷と狐の出所……二七
五、狐の活動振り……三六
六、昔の狐使ひと今の狐使ひ……四五
七、誤れる狐明神の勸請……五四
八、狐の善惡見分け方……六三
九、狐憑退散法の原理……七二
十、科學上より觀たる靈狐……八一

十一、靈狐の口傳……九二
十二、靈狐は概して惡人を退ずる力あり……一〇九
十三、靈狐の口傳の奥傳……一一八
十四、奥傳の雜錄……一二九
一、靈個單修研の要義
二、他人と單獨の秘諦
三、單獨法秘諦
四、體現後の要義
五、單獨先方直感
六、靈狐研究の秘密
七、口傳の奥傳要義
八、靈狐とシャマイズム

九、靈狐と神の人
十、心王の靈個

附錄

靈狐はんだん家庭の樂み……一五五
願望、進退、賣買、病氣、醫方、緣談、運命、讀心、方角、失物、
勝負、人氣、姓名、天氣、走人、職業、待人、訴訟、試驗、旅行、
人相、住居、食物、數理、色彩、物體、貴賤、體質、有無、あてもの、
眼はんだん……一八八
病者の顏を見て生死を知る事……一九〇
神光獨りはんだん……一九一

自在神通靈狐使用の口傳目次 終

神通自在 靈狐使用の口傳

西村大觀著

一 緒言

禮記と云ふ書物に「淫祠福なし」と云ふことがあるが、淫祠とは何んであるか、祭るべからざるものを祭るの謂である、世界のあらゆる民族は、その文化の程度に相應した宗教を有して居る、宗教のある所には必ず何等かの形式に於て迷信が伴ふて居る、そのうちに感覺に起つた幻影とか、沈思の末に成つた想像の産物とかが迷信に導びくものである、人間は一度迷信に囚はれるとなか〳〵醒めないもので、迷信は迷信を生んで遂には不覺のうちに恐ろしい迷信の奈落に沈淪するものである。

迷信者の急激な墮落は、心理學的に考察したならば好箇の研究に値するものがつるであらうと思ふが、それは他日の研究に讓ることゝして淫祠に就ての說をなすことゝする。

大本教の鎭魂歸神に迷ふた淺野文學士は、心靈科學と云ふ迷信の會合を產み、馬賊の一圖をチヤームして大本教が世界統一を夢見たり、自分の立替も出來なかつたお直婆さんが、國も世界も建直しをするなど云ふことは、少しく常識眼で見ても眉唾ものでなければと自警せなくては置かれまい、斯る妄想を云ひ出して世の善男善女を迷はせる之れ淫祠でなくてなんであらう、……まつたお直婆さんのみであるであらうか、昔からの坊さん達は心に愧づる所はなかつたか……

人間には慾望がある、然してこれには際限がない、その限りなき慾望を滿足させ得るであらうか、今更喋々說くまでもなく世人は先刻承知の筈である、俗語に云ふてある如く、叶はぬ時の神頼みとあるが、人は難儀な境遇に陷入るとか、望み事が叶はぬとか云ふやうな場合には、神の力に縋るのであるが、神や佛は果して人間を救けて居るであらうか、その多くの場合は、神が人間を援け佛が衆生を濟度するのではなくて援けられて居ると思ふ心に、自から救はれて居るのである。

佛教五十八派の坊さん達が、我が宗派を維持して行くためには、信者を救けるのでなく、自らを援けるために有ゆる手段を講じて迷信の傳播に努力し、信者の吸集僞瞞に日夜腐心して居るではないか、先づ濟度すべきは是等假面の坊さん達である。

斯樣に各派の迷信勸誘から、備中の最上稻荷販賣人が出來たり、笠森稻荷賣捌人が出たり、穴守稻荷や紋三郎稻荷や東六稻荷や、伏見の稻荷や、豊川稻荷や、被官稻荷や、其他鬼子母神に、辯才天に、摩利支天に、毘沙門天等雜多の神佛賣捌所が出來て居るのである。

然るに是等の神佛が曾て一人だも人を援けた事はないのである、不動に斷食をした祐天上人と云ふ坊さんは、夢に不動尊が大劍か小劍かと質問したら、大劍を望むと答

へたら、大劍を以て祐天の口中に突き通した、それで祐天坊が血を吐いたとて眞實の出來事として傳說してあるが、祐天は自心の本能が夢を見さした位のことは識つて居た坊さんであつたから、それを不動の虛佛を借りて、劇的に嘘構の說を設けて、さも眞實の樣に言ひふらすのは、如何にも迷信を皷吹するもので、其罪惡は決して輕からぬのである。

松葉ケ谷の白猿が日蓮を援けた樣に傳說すれども、日蓮は燒打に大勢が來る位の事は豫知されないであつたらうか……生活が困難になればなる程、人々は現實の利益に飢え、群衆に誘はれて迷信に走り淫祠を祭る事になるのである、世の中は或る心的作用によつて病氣の快癒した事を直に神の功德に歸して迷信を唆る者があれば、一方には神異に託して奇怪なる事を構へ、以て口腹の糧とする行者があるのである、斯くて日本に天理敎が起ると西洋にクリスチャンやサイエンスが勃興した、無智な人々の利己心や、慾望や、恐怖心に乘じて、惡者が故意に又は不知の間に作り出した迷信が、如何ばかりか人生の進步發達を阻害して來たか、又現に阻害しつゝあるのである。

彼の首なし地藏を祭つて安產を祈り、生殖器を祭りて緣談の神となし、榎木を祭りて緣切りの願をかけ、大黑は原印度の生殖神であつたことを識らずに、各家々に祭つて之を崇拜し、虛構の七面明神を祭つて座食遊民の巢窟となして居る、淺草の觀音も、成田の不動も悉く劇的虛構の有樣が窺ひ知られるのである、大阪の聖天は一日に一萬人の參詣人があり、待乳山の聖天にも花柳界や相場師が參詣して我慾を祈り、賽錢が澤山出來ると、坊主が又花柳界に步を踏み出し、相場界に勝負を爭ふなど、實に世は悉く虛構の權化である。

佛敎が始めて我國に渡來して來た時、會ま惡疫が流行したからと云ふて、之れを佛敎の罪となし、敏達天皇の十四年物部守屋は佛殿を燒き佛像を捨てたが、當時の人心には此の行爲が何等の矛盾をも呼び起さなかつたのである、又皇極天皇の三年、東國不盡河の邊で大生部多と云ふ者が、橘や曼椒の樹に附く芋蟲を祭つて常世の神と稱し

この蟲を祭るものは富貴長壽を得ると云ひ、巫祝の徒が之れに雷同して、常世の神を祭れば、貧乏人は金持ちになり、老人は直に若返ると云ひふらしたので、愚民等は家にある財寶を捨て、酒や野菜や家畜等を路傍に陳べて、ひたすら新らしい福の來るのを待つのであつた、又或者は常世の蟲を取つて來て家中を清め祭禮を行ふ等實に滑稽な時もあつたのである。

現代では毎歳稻荷の初午、節分の豆まき等に、有職者蓮が魔性の女を同伴して往き、男女の象が抱き合つて居る偶像を安置する聖天や、淫祠外道の神である帝釋天を祭つた柴又に參詣し、增上慢の坊主たりし半僧坊に詣り、毎年酉の市は天孫人種が一葉の輕舟に乘つて來た時の船頭、即ち波師を鷲の宮と誤鎭したのを誤信して神官共の口腹を充たして居るのである。

往古の一般人民は未開であつたには違ひないが、佛敎が渡來しない前迄は多少堅固な處があつたやうだ、然し佛敎が渡來してからは堅固な思想は悉く佛敎化され雜亂勸請されて仕舞ふたのである、殊に奈良朝時代は全然佛敎化せられて行基のやうな高僧も出で、社會事業にも極力努めたけれども、又迷信皷吹も隨分行つて居る。

平安朝は淫祠迷信は佛敎と道敎とを混入して一層複雜な形式を執り、上流社會をさへも風靡して世を賊するに至つたのである、その尤も害毒を齎らしたものは陰陽道であつた、その陰陽道が現代に殘されて神社佛閣の神官坊僧の生活の補助とされて居るのである、高島流の易占、或は干支學より推命二十有餘種の陰陽的迷信の助勢を釀成して居るのは全く誤信の結果である。

陰陽道の源は支那古來の道敎の惡說で、年に就てけ干支を繰つて吉凶を說き、甲子、辛酉の歳を革命革令の年と云ひ傳へて居ち、又陰陽道に似たもので宿曜說がある、又運命を判斷するに曆法がある、鎌倉時代より室町乃至德川時代及明治を經て大正の今日まで其の迷信雜亂は淘汰されないで益々盛大になつて居る、現代の如きは個人主義を擴張せんために、偶像を利用して親鸞の何百恩忌と云ひ、日蓮の七百恩忌と云ひて

信徒より淨財を吸集するのみにて、その向上を致させる道は敎へないのである。

斯樣に淫祠を拜する程の屈辱をも敢てして恥かしくもない現代の有識者階級は、愚夫愚婦に對して迷信と云ふことは出來ないであらう、釋尊の敎へは佛敎渡來より現代に到るが如き雜亂迷信は決して敎へないのであつた、況んや狐の化物、變名たる荼枳尼天を日本の稻荷の如きに祭るべく斷じて敎へなかつたのである。

釋尊の敎へは天上天下唯我獨尊の自我の擴張、個性の放釋であつた、文明思想の體現者である、而し靈狐の秘諦を內證に傳えて、その正境を大正の今日發表すべく茲に本書を公にするに至つたのである。

個性の放釋……天上天下唯我獨尊。

靈とは法華……個性と靈法華合致。

靈個……即ち靈狐は人間の靈の本體活動を說くものにして、之れを法華經壽量品に「常在靈鷲山」と云ひ、靈とは法華經なり、鷲とは凡夫なり、我等の凡心を法華經に、如同する境を靈鷲山とは云ふなり、とは聖日蓮が敎へたのである。

僞我、妄我、獸我、分裂我、狐我等の種々なる我は、狐疑心を主義とする心理作用であつて、邪狐、野狐、九尾狐等の活躍を意味したのである、而して之れは靈狐の活動振りを眞似る二重人格の致す處であつて、安倍晴明の葛子も人間で、狐ではないのである、それを後世狐の傳說にしたのであるが、安倍の安親の九尾退治や、玄能和尙の法子にて那須野ケ原の殺生石のローマンスは僞作の僞作であつた。

那須八郎と云ふ領主の妻や女中が、二人に見へたのは那須八郎が狐憑的二重人格になつたのであらう、玄能和尙が「汝畜生菩提の心を起せ」と云ふて九狐の化した殺生石を法子で打つたら石が二ッに割れて玉藻前が十二一重で現れて得度した、などゝ云ふのは眞赤な僞作である、況んや元享釋書中の狐憑的奇蹟談が、靈狐の發展を抑え隱す妨害である、何んぞ靈狐の意義を識るの明あらんやである。

現代に於ても未だ靈狐の發展を妨害して居るものは、十三派神道の心學的雜亂と五

十八宗の佛教的偶像教を胚胎した全國の稲荷の狐である、此の狐に魅化されて居る者がザット四千萬人も我國にある、狐迷信は日本の特産物なりとは西洋人が大ひに嘲笑して居るから、茲に靈狐使ひを公開して一切の迷ひを説き、全國の稲荷と狐を全滅させて眞の靈狐の權威を示すのは、人生救濟の使命であり福音であらねばならぬ、「淫祠福なし」それ解せりや、以て緒言となす。

二　靈狐とは何ぞや

靈狐を説明するに當り讀者の參考までに、外國人が我日本に於ける狐憑に就て批判を下して居るから少しく記述することにする。

發明界の大達者エヂソンが「人は一個のものではない何千萬と云ふ細胞の集團である、從つて人の智能も是等細胞の智能の集合に過ぎぬ、靈魂は不滅所が其存在さへ認められない、若し神なるものがあるとすれば、それは畢竟精神(マインド)の事であらう、宇宙には二つの界がある、精神界と物質界がそれで、釋迦、孔子、基督は前者の先驅者であつて、ダーウインは後者の一開拓者である、余は此の精神の存在を認むるけれども靈魂の存在は如何にしても認め得ない、精神は心理學上其實在を究め得べきも、靈魂に到つては有名無實の集合なれば、そこに天國も地獄もあり得ない、世人の所謂靈魂なるものは全く細胞の集合裏より生ずる集合作用に外ならない」と云ふて居る。

米國人は物質主義に捉はれて居るから、エヂソンの主張する靈的問題を識らぬのであるが、曾てベルツ博士が狐憑に關して精細なる研究を公にしたから、今研究の要點を左に摘錄することにする、然し靈狐など云ふ深遠なる問題には觸れて居ない。

第一　此の病を以て日本國の固有病と信ずるは誤れり、蓋し之れと同じき病狀は亞細亞全洲に散在し、唯國によりて其名稱を異にするのみ、是故に人若し此の病氣が鬼類の所爲なることを信認する印度人に向ひ、これ狐狸の所爲なりと云はゞ、彼れ

必ず笑はん、又日本人に向ひて此の病は人體に類似したる鬼の所爲なりと云はゞ亦必ず笑ふなるべし。

第二　狐憑は唯だ此の病を信ずる人のみを侵して此の病を信せざる人を侵すことなし。

第三　狐憑は魯鈍蒙昧なる者、或は病患により若くは劇烈なる恐怖によりて一時精神の衰弱したる人のみを侵す。

第四　本病は狐憑と信ずるものは概ね婦女子少年輩なりとす。

第五　此の病に罹るものゝ自ら以て病因なりと信ずる所の獸類は土地によりて同じからず、或は以て狐とし、或は以て犬とし、或は以て狸となすの類これなり。

第六　此の病は患者の思慮平生に復するに於て治癒す、これ或は本源なりし疾患の治癒するにより、或は某人神佛を請する人の力に賴るなり。

以上はベルツ博士の研究の結果下した斷案であるが、是位の事は博士の說を聞くまでもなく、日本人は先刻御承知の筈である、西洋人が日本の狐憑病などゝ云ふて居るが、それは眞の狐憑病ではなく、神道や佛敎の誤れる敎化が產み出した心靈上の二重人格であるから、ベルツ博士などには幾年經つても判りつこはないのである。

又前に述べたエヂソンが「精神は心理學上其實在を究め得べきも、靈魂に到りては有名無實の集合なれば、そこに天國も地獄もあり得ない」

と云つたのは、氏の悟りたるマインド即ち精神は、物質上の……力……をさへ解釋する事は出來ぬのである、彼のワットが鐵瓶の蓋が湯氣のために動くを見て蒸汽汽罐車を發明したが、其の發明の知識はマインド即ち精神の働らきと思ふであらうが、それは其奧に存す……宇宙大なる靈性であり本體であるのである。

日本の天狗憑、狐憑、犬神憑、飯綱憑等は彼等洋人などが、眞の解釋は出事得ないのである、即ち是等不可思議の靈個なる靈力は余が說かんとする、純粹なる境智妙合の大偉力、金剛不壞の妙體を得る眞髓によつて研究知得せられたいのである。

日本人が一部の迷信より來る憑依的靈性は憑依の信仰の意識的に又は無意識的に其人の心に浸染し、何等かの機會に於て、其觀念が强烈となりて曾て潛在的であつた意識が段々明かに勢を增し來たつて、從來繼續し來たつた意識の中心點を侵して其人格を變換し、全然別人の如き言動を敢てし、若しくは從來の中心點の外に別個の中心點を造り、平常の我の外に、異常の我を生じ、第一人格以外に第二人格を出し、時に第二人格の爲に第一人格の壓迫せらるゝが如きの奇態を生ずるに至るのである。

靈狐と云ふ名稱は從來に於ける第二人格者ではないのである、第一人格のその奥に潛んで、第一人格を發動せしめる眞如、佛性の本體、融通無礙の活動を有する眞體にして、個々の上に君臨して個々の活動をも……事々無礙界々互融……をさせて居る本體である。

一方には理々無礙界々互融と云ふて、あらゆる理想の中心點になつて、狐疑心、狐才子、猿族漢等の不具的心靈の發靈を靈狐に化せしむる實現體である、古來狐憑を治すと云ふ祈禱も、精神療法の一部分であるが、譬へて云へば彼れの偏執を打破して第二人格をして第一人格に復歸せしむるのである。

然しながら彼れの心を服するだけの力がなければ、之れを治すことは出來ないが、かゝる疾患を生するものゝ常として、祈禱等を信ずるの念も亦篤いのであるから、其功を奏する事が多いのである。

靈狐の權威は憑依の魔心を明かにして、之れをして魔精を脱却せしむるに大功を奏するものである、魔は外より來らずして內より來るものであるから、心の强きものは、決して魔の入るべき餘地はないのである、「心」生ずれば種々なる法生ずると云ふ事は自然の理法である。

然して心は迷悟の根本である、恐ろしいと思ふ一念は枯尾花をも幽靈と誤認したり、落葉の窓を打つのも怨靈妖怪の來るにはあらざるやと疑ふ、時計の鳴る音を聞くにもチン〳〵と聞えたり或はチク〳〵と聞えたり又はコツ〳〵と響いたり、同じき一個の

時計の音も樣々に聞ゆるのである、又天井に現はれし染汚の形も人の顏の樣に見えたり、花の形と見えたりして心の作用で如何樣にも見えたり聞えたりする事實は既に吾人は經驗に明かなる所である、斯樣に其觀念によつて感覺に錯誤を來たすのであるから。

「觀念の力は有中に無を現はして幻想を生ぜしむ」

との決論を得ることになる、狐憑と體現し飯綱狐と現出するのも心に魔を生ずるからである、「超日朋三昧經」には吾々に左の如く敎へて居る。

「魔に四事あり、一に身魔、二に慾塵魔、三に死魔、四に天魔」である、たとへば兩木の相階なれば則ち火を生じ、還つて其木を燒くが如し、火は水より出でず、風より出でず、地より出でざるなり、四魔も亦此の如し、皆心より生じて、他より來るにあらざるなり、譬へば畫師の像を作るに當り、手に隨つて大小なるが如きも、手が勝手に畫くにあらずして心の作用を手に命ずるのである、四魔も亦此の如く、心堅固にして起る所なければ則ち四魔なき也」である。

幻覺は實際上何等外界の事物はないのであるが、それを有る如く知覺するのは心の變態にして即ち迷ひである、東京深川區西六間堀の或車夫が、羽田穴守稻荷に七日間籠居して、支那人のテーハーを以て金を得んとの心願をかけ、遂に狐憑となり「吾れはおさき狐である」と云ふて諸所を漂流したが。

是等は觀念の力によりて、神經興奮を起し、それが腦髓に傳はりて感覺現象を生ずるなりと說明し得らるゝも、凡俗の徒はこれを外界より來る異樣の現象とするのである、余が手にかけた者で大森の魚屋の悴は「狐が眼先に步行して居る、合掌の指先にも狐が居る、六鄕の神主が憑けたのだ」と云ふて狂者になつたが、余は拭ひ取つた紙を火に投じて其燃るに依つて本心に復させたが、世に傳ふる幽靈談なども、多くは此幻覺と同じく彼等は其觀念を强烈ならしめるのである。

心理學者の云ふ幻覺も亦記憶に因するものにして、心裡に何の記憶なき事の幻覺を

生ずるなしと說いてある、……靈狐は實に是等の邪觀念を吸集し統一して、純眞無垢の活躍振りを致し、人類個々の責任を果させる助勢をするのである、靈狐とは何ぞや……又以て此の理に極す。

三　狐の種類と荼枳尼天

靈狐を敎へるには是非……狐……と云ふものが人間に對して奇態なる現象(假りに)をなしたと云ふ事について、その狐の種類を出さなければならぬ順序となるのであるから、今それを述ぶることにする、而し凡てを靈性のバロメーターで判じて貰はぬと狐の種類を見て居る內に、自ら狐に魅化されて仕舞ふから迷ふてはならぬ。

彼のコックリやフランセットで高倉稻荷と云ふ名稱を紙に書いたと云ふので、高倉稻荷は何處にあるかと探し歩いて、遂に狐憑になつて了つた學者さへあるのであるから、特に迷ふなと注意した譯けであるが、其學者は心理學者であると云ふことだから驚くではないか。

現代の日本は外來思想の動搖より眼醒めて眞の人間性を認めねばならぬ時である、否日本人としての立脚地を本元的に復さねばならぬ時代となつて居るのである、古い思想の誤れる方向を脫して「根本的基調へ歸る」と云ふ事が尤も肝要であるから、フランセットなどに賴り、精神混亂を救ふて貰ふなどゝ慾求して居る一部の學者や……模造文明の惡戲に墮落して向上する事が出來ない糞壺の中のウジの如き連中では仕方がないのである。

日本人として現人神としては、餘りに墮落し過ぎる次第であるから、その墮落を救ふべく、高倉稻荷などに魅化されて居る所の精神上の分類や、その現れんとする狐の種類を擧げる事にせう、祈禱上では左の如く記されてある。

七狐の居所

(一)　肝魂狐—腹にあり胸を見る事を好む。

(二)逢難狐―左脇に居て物を破損する事を好む。
(三)魂皈狐―股にあり寢たがる事を好む。
(四)胞身狐―右の脇にありて面を破る事を好む。
(五)天狐―頭にありて天を知る事
(六)中狐―背にありて虚言を云ふ。
(七)地狐―腰より下にあり走りたがる。

以上は祈禱をすると體現して來るので、信者も祈禱者も之れを眞實の狐憑と思ひて取扱ひ、左の如き教へをも爲して居るから參考のために記述して見やう。

「狐に位あれば教化第一也、最も何れの狐とあなどること勿れ、あなどれば却つて立退ずして言はず、又愛着にて憑きたるあり放れがたし。口傳に言く、高神にて幣を上るならば言ふべし、幣を拔き(×)此の如く組みて見せるなり、此時組たる幣の中へ行者の顔を入れて問ふ可し、「何處の行者の勸請と實名とを名乘り給へ」と、問ふ處は隨分敬ふ事が肝要なり、多分狐也、先々神と云ふもの也、必ず輕賤す可からず、幣を高く上ぐるならば行者も敬ひ法味を上る可し、又狐精が死靈となる事あり、教化第一也」

之れは心象が狐精になつて居るのを識らずに丸呑にして信者を教化して居るのである、斯樣なだらしのない祈禱上の思想が、各信者に印象して居るから、靈狐などを教へても困難である、故に先づ七狐と云ふ心理作用を解決し、そして決論に荼枳尼天の事を出す事にせう。

(一)肝魂狐―腹にあり胸を見る事を好む、と云ふのは吾々人間の肉團心、即ち世間學の精神と云ふ一部の心理狀態に、外部の五官能から侵入して來る二重活動があるから之れが問ひつ答へつ人の胸も見れば自分の胸も見るのである、五官能と常識との間にあるチョッピリしたる精神上の作用である無籍者の樣な心靈が活動するからである。

(二)逢難狐―左脇に居て物を破損する事を好む、と云ふのは、祈禱をすると患者は兩手を肱共に脇腹に着けて放さずに居るから、行者が中指を以て押し壓すれば、ニコニコ笑ひ出すのである、此の心理作用は外部に現はれざる意識て、自分で認識し得ざる潜在意識の分裂作用中の一現象である、感情の衝突より來るのであつて、內面より來る衝動ではないのである。

(三)魂飯狐―股にあり寢たがる事を好む、と云ふのは、易經の澤山咸と云ふ卦の辭に「其股に咸ず其隨つて執る往ば吝」とある如く、男女肉感の刹那は、恍惚として魂飯を奪はれたる如き心理狀態である瞬間であるから、之を淫狐とも云ふのである、即ち色情的狐精と化したのを云ふ也。

(四)胞身狐―右の脇にありて面を破ることを好む、と云ふのは、之は女性が常に人體の裝身具及び人の身體一切に就て批評し評價する狐精の心理狀態を云ふものにして、劣等なる心靈發見の意義である、此の心理作用は婦人月經時及懷妊時に盜心が出る時の心理狀態と同じである。

(五)天狐―頭にありて天を知る事を好む、と云ふのは、之れは由井の正雪の如く、人を謀らんとする心理狀態であつて、增上慢の心理を云ふものである、或は慢心氣狂と云ふが如きであるから、此の例を引證すれば、蘆原將軍、レニン、ガンヂ、ケマルパーシヤ、奈翁、太閤等を推してよいのである、天狐は癲個である、癲倒した心理である。

(六)中狐―背にありて虛言を云ふ事を好む、と云ふのは、之れは狐才子、猿族漢である、人の面色を見て物を言ふ卑劣なる心理狀態であつて、人を謀らんとして人に謀られ、常に人の爲に馬の足となる心象體現を云ふのである、即ち中ブラリンと云ふので、善惡兩途に運動する心理である。

(七)地狐―腰より下にあり走りたがる、と云ふのは、劣等人種の權化であつて、酒乞食と云ふのも此の心理の表現である、人の用を辨じては飲食をして喜び樂しむ心靈上

の缺陥者である、雷同せられる小人である愚人である。

先づざつと斯樣に評を下して置けば祈禱者に魅化されることはないであらう、七狐の內一より四までは小乘的個人主義者の心象發現であつて、五より七迄の三つは大乘的共同精神に充ちて居るのである。

總じて狐は……氣が常識を脫して居ると云ふのである、獨逸の個人主義者であるニイチエと云ふ哲學者は、氣狂にならなければ著作が出來ないと云つたのであるから、常に狐憑の樣に常識を逸して居たのである、何れも七狐の狐精を發揮して居る不具者であつた。

七狐の外に白狐がある、又其外に金毛九尾の狐がある、それから佛敎が渡來してから狐が荼枳尼となり、豊川荼枳尼天となつたのである、荼枳尼は梵語の…DAKINI…の音譯で……拏吉儞、荼枳尾、とも書き、密敎では天部に屬する神であるから陀天とも呼び、印度では暴惡の女神カーリーKALIの侍女で常に人肉を啖い、一名飲血鬼と云ふて居る、大日經疏七に最も詳細にその性質を擧げてある。

世間にこの荼枳尼の法術を行ふ者があるが、荼枳尼の法術とは自在を得るの呪術である、荼枳尼は人が命終する六ヶ月前にこれを知つて法術を行ひ、その人の心を取つて食ふのである、それを食へば法術を成就して一日間に世界中を駈け廻ることも出來、意の欲するところ叶はぬと云ふ事がない樣になる、又荼枳尼は自分の好まぬものは、術を以て病ましめることも出來るが、人を殺すことは出來ないから、人の死ぬ六ヶ月以前に心を取り、他物を以てその代りに置き換へて行く、然して心を取られた人は、壽命の盡きるまでは存命して居るのである。

然し荼枳尼は初めの內は人を殺してその心を食ふて居たのであつたが、毘盧遮那如來が惡魔降伏の降三世明王の法門に住し、大黑神を化作して大威力を具へ、灰を身に塗り曠野に行つて法術を行ひ、荼枳尼の輩を集めて、汝等は常に人を殺すから、我今汝等を呑み盡して了ふと云つて呵責した所が、荼枳尼共は佛の威光に恐怖して遂に佛

に歸依してしまつたのである。

茶枳尼は佛に肉を食ふ事を禁ぜられたので、困つて佛の慈悲をお願すると、以後は死人の心を食へと云はれたのであるが、人が死ぬ時迄待つて居ては、夜叉の大將共が、先を爭ふて死人を食ひに來る故、とても私共は死人に近寄る事が出來ないと云ひ出たので……人の死ぬ六ケ月以前に人の心を食ふことを許されたのである。

以上は大日經疏の説明の大意であるが、この茶枳尼の法を修するものは、又茶枳尼と等しい通力を得ると云ふのである、然して此の茶枳尼衆は末那識を中心とした、潜在識の團體を言ふのであつて、末那識と云ふのは、自我の强い貪慾の强い自己中心、即ち利己主義の賣笑婦の如きを云ふのである、此頃日本の婦人や子供が頸に眞珠の樣な輪をかけて居るが、あれは西藏の茶枳尼天が頸にかけて居る珠數の眞似である、珠數輪をかけて居る者は必ず利己主義の權化であると觀て差支ない……米國人の如きがそうである。

そこで狐の種類は茶枳尼に來てまとまりがついた樣であるが、七狐も金毛九尾も茶枳尼もその本體は、吾々の心靈狀態に起る處の幻映を畫いたものであるから、潜在意識の方に着眼せないで、狐や茶枳尼天に誤迷信しては人間の眞價を認めることは出來ない事になるのである。

狐なる動物の一種は、人間とは何等の關係もあるべき筈のものではないのであるがそれを人間の方で、無理から狐を祭つて人間の心靈の上に、その觀念を釀成するのであるから、遂に醱酵することになるのである、人間自らが作る罪である。

四　稻荷と狐の出所

稻荷神社は、もとは立派な純粹なる神道の社であつたかと思はれるが、これも亦後世の種々なる傳説や迷信やらが加はつて、豐川の稻荷などになつたときは、全然印度教的の淫祠になつた樣に思はれる、豐川稻荷が三河で一廓をなして、日本人を魅化し

て居るが、あんな無用の神社は先づ一掃して仕舞はなければ日本人の恥である、文明を誇る國民として實に恥かしい事ではないか。

豊川稲荷ばかりでなく、何處の神社でもその建立の因縁とか縁起とかは、多くは神主が勝手に作つたもので、荒唐無稽のものゝみである、稲荷神社の總本家の觀ある伏見の稲荷に就ては、神道的の傳説と佛教的の傳説との二つがあるが、餘り技巧は弄してない樣である、何れかと云へば野趣を帶びたものであつて、其一つは元明天皇の和銅年間に、山城の伊奈利山に泰氏の長者が居て、其富貴に任せて次第に增長し、一日餅を的にして弓の稽古をした所が、箭が餅の的に當ると、その餅は忽ち白鳥に化して空高く飛び去つたと云ふのである、茲に於て始めて其罪を後悔して稲の神を祀つたと云ふのが其説である。

他の佛教的の説は、智證大師が弘安十二年に熊野へ參詣した還向の途中、紀伊國石田河下稲羽の里を通る時に一人の老人と二人の女とが居て稲を苅つて居るのに逢ふた

「此の三人の者は即ち化人であつたので、これを稲苅大明神」としたと云ふのである。

又稲荷大明神流記にこの二説を混一して、和銅年間の創始と弘法大師とを強て結び付けやうとした樣な説を擧げて、和銅年間から百年許りの間、龍頭太と云ふ不思議な男が居た、その顔は龍の如くにして顔面から光明を放ち、夜でもあたりを晝の樣に照して居たが、此の男の姓は荷田と云ふのであつた、或日稲を荷つて居る時に弘法に出會つて、稲荷として祀られたのであると云ふてある。

稲荷の神は五穀の神で、その本尊は……倉稲魂命……を祀つたものであらう、倉稲魂命は伊勢の外宮の豊受大神と同一の神である、秦中家忌寸等の遠祖にあたる伊侶具秦公が……五穀の豊熟を祈るために倉稲魂命を祀り、合せてその神の父母の素盞嗚命尊と大市姫命とを祠つたもので、爾來農業を以て建國の基礎として居る國だけに非常な尊崇をうけ、都近いために行幸なども仰せ出されたるものと見える、稲荷神社考上には……。

「此の鳥神は田穀を成幸給ふ宇賀之御魂神にて、食津物を麁忽に射戯れしを怒らせ給ひ斯在奇異狀を示して神靈の顯坐るにこそあらめとて、御親神（素盞嗚大市姫）と共に三座の社を營建て齋祀したるなるべし」

稲荷を造り上げる爲に、伊侶具秦公が餅を的に射た爲めに惡者として稲荷に位と力とをつけたのであつて、倉稲魂を白鳥にしたのである、而して左の三社。

倉稲魂、素盞嗚、大市姫を稲荷の三柱の神とは或は異說があるが、本社の倉稲魂だけは異說はない樣であるから、是等のことはあまり詮索する必要もなからうと思ふ、この稲荷の三社に、本地垂跡の說が加はり、稲荷と云ふ字義から附會して今度は弘法だとか、智證だとか、と因緣をつけかけて來たので、第二第三の傳說が出て來たのではなからうか、弘法大師や智證大師の時と云へば、平安朝の初期で、日本は可なりよく開けて居たのであるから、稲を荷つて居る三人連れの百姓位は、數多いことであつたらうと思はれる。

（類聚國史三十四に、「天長四年正月には淳和天皇の御不例を稱して稲荷の神木を伐つた故だとして、其平癒を祈つたとき、忽ち驗があつたので稲荷に位階をお授けになつた」と記してある、それから下つて源平時代には、高博と云ふ者が母の重病に手を盡したけれども、一向療治の効がなかつたので、稲荷の社に七ケ日參籠して居たが、第七日の夜琵琶を執つて上玄石象の曲を彈くと、御寶殿の中から金の扉を押開いて、みづらの童が一人出で來たので、高博も神慮の御受納を憑しく覺えて即ち下向してみると、母の重病はたちどころに平癒して更に恙なくなつたと云ふことである（盛衰記）

頼朝が天下安全、武運長久、兇徒平定を祈つたことは國史にも出て居るが、又元亨釋書に桓舜が貧を苦にして居て山王を祈つてみたが驗がなかつたので今度は稲荷明神に祈願を込めて居ると、七日目の滿願の日の夜になつて、明神は美女に現はれて桓舜の胸を開いて紙に千石と書いたものを入れたと思ふと、其處へ山王の權現が現はれて思ふ仔細があるからと云つてその紙片を取つてしまつたので、桓舜は利慾の念を捨て

、高僧となつたとしてある。

高博と頼朝の場合と同じ時代てはあるが、清盛の祈り方には別種の信仰があつた樣にも見られる、この時は稲荷はその性質に變化を生じて、荼枳尼とか狐とかの信仰が混つて居たらしく思はれるからである。

身延山下に住くと石割り稲荷と云ふのがある、之れは住昔日蓮が身延山に往つた時、道案内をしたと云ふので有名な傳説がある、池上にも長榮稲荷と云ふのがあるが、之れも池上の守護神として鎮めてあるが、歴史は坊さん達の勝手の作である、備中高松の最上稲荷も七十七社の末社を設けて天下の愚夫愚婦を僞瞞して居るのである。

佛敎の各宗は悉く稲荷を勸請せないものはないのであるから、文明主義を體現すべく敎へられた釋尊は、嘸かし泣いて居ることであらう、……余が大正十二年十月二十三日埼玉縣大宮に往つた時、某醫師の娘が肺炎加答兒に罹つて居たが、日蓮宗祈禱者に祈禱をして貰つたら、附近の稲荷の眷屬が憑いて居るとて、……正福稲荷大善神……と勸請して貰らつたと云ふことであつた、その狐憑の娘を心源術で施法を行つたら面白い問答があつたから參考迄に左に擧げることにしやう。

余と某醫師との問答

問　先生此の床の間に勸請したのは何ですか。

答　これは私の娘が肺炎カタルを患つた時、附近の稲荷に祈つたとかで、人より勸められて日蓮宗の祈禱をしたら、眷屬の野狐だと云ふので祭つて貰つたのです。

問　それで其肺炎カタルが治つたのですか。

答　癒らないのですが體現した爲めに祭つた丈です。

問　それてはその守護神を娘さんの體現にて拜見致しませうか。

答　何分願ひます、直ぐに娘を法座に据へませう。

以後は娘との體現問答となるのてあるが、醫師たるものが、祈禱者に賴んで肺炎カタルを祈禱して貰ふと云ふ事は、如何に解決すべきであるか、大いに靈肉調和をせ

ねばならぬ現證てはないか、藥物療法と祈禱……之れが結論である。

さて余は娘の守護神たる正福稲荷大善神を體現させて問答を開始したのてあるが、先づ此所にお座んなさいと娘を座らせたのてある、而して心源術の施法を行つたら、飛動狀態になつて動物的にフー、フー、フーと吹くのであつた、依つて余は體現の娘に對して靜止を明示した所が直ちに明示の如く靜止狀態になつたから質問を試みた。

問　守護神たるべきものが、その飛動、その動物的狀態は、守護神としての威儀を缺いて居るではないか。

答　吾れは本人の守護神たる正神大善神であるが、本人の心の修行が足りないから此の狀態である。

問　心の修行が足りて向上すれば守護神の名義は無になるがよろしきや。

答　本日より飛動及び動物行爲は斷然中止す。

問　然らば中止の上は心王一元の靈體となつて交靈及靈覺の一切が可能なるや否や。

答　明日より五十日間に萬事可能なり。

以上の問答により五十日後實驗したるに萬事正確であつた、中にも清浦內閣の崩壞を二月十四日の靈覺發聲にて「來月より三ケ月の後崩壞」と云はれたので、其的中の有無を試驗中加藤內閣の成立にて的中した。

故に狐憑たる心理狀態は、潛在意識の分裂作用たることは動すべからざる確證がある、靈狐とは此の正福稲荷大善神が、心の修行を向上して守護神の名が無くなり、一靈元に全精神が統一した境が即ち靈狐である。

然るに日蓮宗祈禱などて勸請された稲荷は、本心の靈體を認めない幻覺、錯覺の境域故に、勸請のあとが何時でも跳り子になつて頭を痛め、腹を痛め、身體中を患めて居るのであつて、心理狀態が統一せないでキョロ、キョロして落附かないのである。

それで稲荷と狐の結び附いたのは、佛敎と結び附いてから茶枳尼の思想に魅化され

て、稲荷か狐か、狐か稲荷かと見分けの出來ないことになつたのであるが、元來狐と稲荷とは何等の關係がないのである、恰も油と水との如きものであるのを、それを識らずに稲荷と云へば狐を祭つてある樣に思つて居るのは誠に哀れむべきである。

五　狐の活動振り

昔から狐の嫁入りだとか、狐が人を魅化すとか云ふて種々と恐るべき傳說が澤山にあるが、日本歷史の一半は狐物語りが占領して居るの觀がある。

中山に六浦妙法日荷と云ふ坊さんがあつて、その坊さんが祀つて居る古堂があるが、此の堂に居た道樂坊主で山本日諦と云ふ武士あがりの半僧半俗があつた、その日諦が常に人々に說敎して狐の活動振りの虛搆を傳說して居たから左に示して置かう。

「身延山に滿行院即ち積善坊日勇と云ふ行者があつて波木井川の邊に小屋を建て、一千日間水行したが行を滿了してから諸國に腕試しにと出かけた、ところが伊勢の松坂に油屋と云ふ千人も泊れると云はれた大きな旅宿があつたが、その旅宿の妻女が玉藻前の如き古狐が憑いて居たから、內宮下宮の神官が二十人、眞言坊さんが十人、都合三十人で祈禱をして居たが、三年もかゝつて居ても更に効果がなく、狐は一向に退散せないのであつた、或日積善坊が油屋旅宿の附近の理髮所にて頭を剃らんと這入つて待つて居ると、油屋の妻女の話を耳にしたから、頭も剃らずに急いで出て行き油屋旅宿に泊りを賴み入れた、然るに油屋では上を下への大騷動で客などを泊める事は出來ないと斷はられた、けれども積善坊は、臺所の隅でもよいからと無理に賴んで泊めて貰ふことにしたのである、而して其日の夕飯時に給仕に出た女中に家の樣子を聞いてみたら、理髮所で耳にした如く三ヶ年も行者が掛つて居るが治らぬと云つたので、積善坊は斷言した「そんな木葉神主やウジ虫法印等が何年かゝつても治るものか、吾輩なら彈指で退散させて仕舞ふと云つたので、女中が直ちに此の事を主人に話した、すると主人は直ぐに來りて祈禱を乞ふたのである。

そこで積善坊は翌朝早く起き出でゝ、伊勢の市中を歩行しながら右手の五指に陀羅尼呪を封じ込んで晝頃に歸宿し、それより身體を調へて妻女の病間へ這入つて行つた、所が妻女は突然眼をさかだてゝ怒つた……誰だ人の病間に無斷で這入つて來たのは……積善坊は……默れ余は如來の使ひであるぞ……一念の迷ひ我儘によつて魔心に變化し家人を惱め居るこの業報人奴、我が打ち出す彈指の靈力を觀よ、と云ひながら拇指と中指とで妙法蓮華經序品第一、と大喝一聲强く彈いたら、今迄三十人の行者に對しては勝手な事を云つて居た此の狐憑者は、忽ち身振ひして立ち上りドタンと仰向けに倒れたまゝ七日七夜寢たきりであつたが、八日目の朝起きて覺醒して本氣に復したのである」

積善坊日勇坊さんはその時天狗の鼻高々として歸つて來たのであつたが、三十人の行者は自分の行力の足らないことを思はずに、積善坊を恨んで逆祈りをなしたのである、積善坊は身延に歸り師僧の日遠と云ふ坊さんに種々なる話しをして居ると、身體がだん〳〵動かなくなつたと云ふことである。

以上は山本日諦と云ふ坊さんの談道であるが、其取捨は見る人の自由である、靈狐の解釋から判斷すると、全部の形式は虛搆即ち說敎者の……舌……と云ふ事になるのである、「旅行者は常に虛言を以てす」とスペンサーと云ふ人が云つた如く、山本坊さんも此の格言の人であらう。

然し積善坊が彈指の刹那旅館の妻が立上つて倒れたのは、積善坊の靈性の壓迫の力であるので、靈狐發現に對して此間丈けは共通して居ると云ふ事になるのである、即ち靈狐の背景に眞の靈性の閃きがあつて、その靈性が妻の靈性と共通したのである。

狐の活動振りがこんな現象を來たして居ると云ふことは、單なる狐として觀れば三文の價値もないのであるが、狐精研究から見ると一切の形式及び外廓は捨てなければならぬ。

余が祈禱術研究時代に、金港堂と云ふ書籍店に出入する人の親類の婦人に、氣狂の

悴があつて、巣鴨病院に九年も入院して居たのであつた、其悴の病氣を癒す樣にと依頼されたから、悴の實母に就て祈禱をしたら狐憑の狀態となつた、それで心靈的內面をよく審判して見たらば、その婦人は嫁に往つた先きの姑を慘酷に取扱ひ、時としては姑に馬乘りとなつて咽喉を締めた事もあつたと云ふのである、又嫁に往かぬ前にも、或者と肉的關係をして懷妊したのを、出產の時締め殺したとの事である、こんな具合に非道な事をした因果律によつて、一人しかない悴に其報ひが現はれて氣狂となつたのであつて、祈禱の時にこの貪慾心が……狐憑狀態になつたのである、俗に云ふヲサキ狐の樣にチヨコチヨコして隅の方に往つて隱れたり、人の眼を盜んだりして一生涯無意味な日を送つたのである。

余は之れを氣毒に思つたから審判してやつたら狐精が解除して精神病院から退院したのであつたが、後三、四年にして死去して了つた、又余が心源術を公開する少し前に使用した質のよい婦人の靈覺者があつたが、その婦人が惡性の夫を持つたので、それと緣を切るために迷信を起して、板橋の緣切榎に參詣した、其歸途便所に這入つたら、此の時……野狐が憑いた……と云ふので本所表町の長榮講の行者に祈禱して貰つた所が、その野狐が出て體現したのであつた。

余は之れを靈狐養成的に仕上げたら、實に善良な靈狐體現者になつたのであつた、普通世間の人々が傳說して居る狐の話しは概して虛構の說である、埼玉縣の蕨在に梅木稻荷と云ふのがある、そこに七歲になる大畑こう女と云ふ少女が居たが、其少女に狐が乘り移つて豫言をすると云ふので、それが大評判となつた。

ところが大畑こう子の豫言云々と云ふのは眞赤な僞りであつて、蕨附近が水害のため大捐害をしたので、其發展策のために、百姓に日給を拂ひ、無賴漢を賴んで虛構の說を爲し、人を僞瞞して四方八方から迷信者を吸集したのであつた、こんな風で元より根底のない狐の活動振りであるから、短日時の間に立消ドロンとなつて了つたのである。

又練馬村に龍神様と云ふて、藝者上り風の老婆が黒猫を二十疋も飼養し、御宮をトントンと叩いて龍神様の御告けを聞くと云ふて大衆を吸集し、毎月二十三四日は殊に大繁昌であつたが、これも狐憑より來る心理狀態であつたので立消となつて了つた。

備中高松の最上稲荷に老婆が居て狐憑の僞瞞的豫言をしたが、これを又澤山の坊主共が虛構の宣傳をして、世人を欺いて居るのは實に不都合な話しで、人道上重罪犯と云つて差支へはなからふ、日本全國の稲荷なるものは、多くは虛構的僞瞞、心靈的詐僞であるから、宜しく法律を以て一掃すべきである。

狐憑……人に狐が憑くと云ふことは斷じてあり得ざることであつて、殊に狐が人の病氣を治すなどゝ云ふ事は絶對にあるべき筈はないのである、三條小鍛冶宗親が稲荷山に籠つて刀を錬へたら、その時狐が合槌を打つたなどゝ傳説されて居るが、是等も亦眞赤な虛構の説であつて、狐に合槌など打てるものでない、又若し左樣なことが眞實あつたとすれば、それは狐の合槌ではなくて、宗親の靈性の二重活動であつて、錬へて居る時に幻覺作用を起したのである。

余が易經研究時代身延山に瀧行をしたが、其時天雷飛妄と云ふ易の卦意が判明せぬので、精神統一をなして寢に就いた所が、八十歳位の昔の易者風の老人が枕元に座して、易意の解釋をして呉れたのである、これは余が靈性の二重活動であつて、實際何の不思議もないのであるが、こんな事がさも大仰らしく世間に云ひ觸らされるのである、三條小鍛冶が稲荷山で狐が合槌打つたと傳説されて居るも、劇的虛構……の説だと判れば何等のいさくさもないのであるが、之れを狐の活動振りの樣に傳へるから罪惡を釀すやうになるのである。

往古命婦の社に　陛下から御幣をお供へになつた事があるが、東寺執行日記私用集二……に命婦の事を記して、船岡山に白狐の夫婦があつて「夫の身は毛白くして銀針をならべたる如く、尾の端上りて秘密の五古をさしはさみたるに似たり、婦は鹿の首にして身は狐なり」とある、畜類の身ではあるが天然の靈智を得てゐたので神の眷屬

として戴きたいと願つたので、明神の使者となつたと云ふ、夫は上の宮に仕へて小芋と呼び、婦は下宮に仕へて阿古町と呼んだとある、又稲荷鎮座記にも同樣の說を出した後……至德三年五月の日附があるから……建永元年八月十六日に陛下が命婦の社に御幣をお供へになつた事が、明月記に記してあると靈獸雜記の所に出て居る。

命婦の社と云ふのは阿古町の狐の異名で、此の起源は一條院の御宇に、進の命婦が七日間明神の社に參籠して神を祈り、其加護によつて立身して宇治殿の妾となり、次て北ノ政所となつたので命婦と云ふ舊の自分の稱號を阿古町の狐に讓つたのであるつ

狐の活動振りと思ふて妾の名を附したのであるが、愚夫愚婦の迷信の道具で、狐とは何等の關係がないのである、命婦自身が狐化して居るのであつて、阿古町狐社に祈つても祈らなくても、自分の身の上り下りはあるのである、唯自分を空虛にして狐の守護を得たと云ふて、虛構たる事が理解し得ないのである。

靈狐……から觀察すれば、こんな狐に魅化された人々は、實に哀れむべきものであつて、自分の眞價の靈を認め得ないで、動物崇拜に墮落して死んで仕舞ふのである、だから釋尊も

「一切衆生が異の苦を受くるは如來一人の苦なり」

と人心の愚迷を悲んだのである。

六　昔の狐使ひと今の狐使ひ

倭訓栞集に「鄙俗は狐を直に神とし祭りて福を祈る事天下の風を爲せり」とあるが、狐を祭りて人を魅化す道具としたのである、又茅窻漫錄に「いつの頃より何者の云ひ出だしゝか、野狐を稻荷の神使と稱し、初午の日は天下一統貴賤押しなべて家々に持囃し、赤小豆飯、油煮等の供物種々とゝのへ、町家士民の中にても其格式定例ある家は、居宅の內に鎭守の小祠稻荷を勸請し、正一位大明神の幟を立て、往來群聚いはんかたなし(中略)野狐はもと淫獸妖魔の物、北方陰地に多く居て白晝の中は幽闇の間に

隱れ、夜中のみ出て物を掠め取り、人を惑し寃をなす(中略)此等の妖魔次第に行はるゝにより、貴賤上下押しなべて野狐を尊恐する事鬼神の如し、妖巫邪頭は流行の時勢に乘じ種々の奸惡をめぐらし、一の獸を見出す時は稻荷の來現と稱し、又狐惑の人あれば神降りたまうなど云ひ觸らし、神職掌る家に授位を請へば、直ちに正一位大明神を賜はる、それより己が居宅に社壇を構へて、鳥井瑞垣等を飾り、木綿繦をかけ、幣を持ちて人の吉凶禍福、物の得失出入、或は病の治不治、方角の良否を云ふ、これを窺ひ又は御指圖など稱し、所々に數多あり、故に近歲新造の社に稻荷ほど流行するは外になし、畢竟は愚昧文盲の鄙俗おの〳〵淫獸妖魔の智を假りて、福を求め利を得むとするより、次第に行はるゝなり」と。

昔の狐使ひは斯くして人心を狐惑したのであるが、現今にても昔の迷習が殘り傳へられて、日本全國で人心を魅化して居るのは……私娼が青年の肉を腐敗さして居るのと少しも違ひはないのである、元來信仰は安心立命が究極である、心靈上の內面の觀察であるのを、客觀の動物に祈り、自己を空虛にして迷執するのは實に亡國の因である。

一體狐は昔から不可思議な獸として考へられて居たのであるが、其起源は支那ではないかと思はれるのである、西陽雜俎に「野狐を紫と名く、夜尾を擊つて火を出す、怪を爲さんとすれば必ず髑髏を戴いて北斗を拜し、墜ちざれば則ち化して人となる」と云ひ

又抱朴子に「狐狸豺狼皆壽八百歲、五百歲に滿れば即ち善く變じて人形となる」とあり(谷響集七)……同八には「狐千歲にして始めて天と通じて魅をなさず、その魅するものは多く人の精氣を取りて以て內丹となす」とある。

日本では平安朝の初期の傳說を集めた靈異記などにも話しが出て居る、尤も靈異記には何んでもかんでも不可思議なものとして取扱はれて居る、……百練抄等に延久四年に藤原仲季が、白奪女を殺したので土佐に流されたとあるのは、多分白狐であらう

と思はれる、奪女と云ふ言葉は、土佐日記には老女の意味に使つてあるが、宇治拾遺には明かに老狐の意味であるから、白奪女と云ふてわざ〳〵白とことわつた所を見れば、百練抄も多分奪女を老狐の意味に使つてゐたのでは無いかと思はれる、白狐を殺して流罪に逢ふと云ふのは、今日から見れば變なことであるが、迷信の力の強い昔では全然有り得べからずとは云はれない事と考へられるのである。

而して平安朝時代には、狐は妖術者として畏怖せられ、その怒りと復讐とを恐れるのあまり神聖視せられた傾きさへあつた、妖術者としての狐は、佛敎で云ふ六神通即ち他人の心を知り、空中を飛行し、一切のものを見、變現自在の通力を待つて居るかに考へられて居た、此等の惡迷執が……信州の松本稻荷が拍手を打つと同時に何千里でも飛び行くと云ふ傳說を誤り信じて居るのである。

淺草觀音の境內に被官稻荷と云ふのがある、そこに行者だか坊主だか居るが、被官稻荷に願をかけると、藝者は良い旦那が出來る、雇人は良い主人に雇はれる、勤人は良い所に仕官すると、云ふて神道の祝詞を讀み、念佛を唱へ、妙法を唱へて中心力のない祈りをして居るが、人間が狐だか狐が人間だかさつぱり譯けの判らぬのである。

過去七八年前に流行した千里眼の心理的狐使ひである催眠術も亦同じである、大本敎の珍狐鬼神も劣等なる狐使ひである、友淸天行もそうである、加藤確治式もさうである、コツクリさんも劣等なる狐使ひである、フランセットもさうである、佛敎の荼枳尼栴陀利經には、荼枳尼を、白辰狐王菩薩としてあるところを見ると、狐が夜中に彷徨して怪を爲すものであると云ふ點を取つて、昔も今も人心に怖畏の念を懷かせて、人を僞瞞して居るのである。

稻荷と荼枳尼と狐との三者が混合して遂に最後に荼枳尼天豊川稻荷と云ふ樣なものが出來たのであらうと推定することが出來るのである、外道の食人鬼を麗々しく名乘つて、豊川稻荷荼枳尼天などゞ云つて、浮氣商賣の連中の金をせしめて居る禪宗坊主は……

亡國の罪人たる足利直義が、夢窓國師の弟子になつて荼枳尼天を祭り、大ひに榮へたのを見て、妙吉侍者の眞似をする亡國の罪人である。

要するに荼枳尼は惡魔である、塩尻四十六には「佛敎の荼枳尼は、地藏菩薩の化現て、地藏はその相を鬼類に現じて悉伽羅野干となり、季の世この野干を祠りて荼枳尼と稱して福を求め幸を祈り、或は稻荷と呼んで幣帛を捧ぐる族多し」と記してある。

こんな風に都合よく物事が運べは何事も云ふ事はないが、これは著者が、狡猾な坊主共の虛搆を聞いたから、それを其儘書いたに過ぎないのである。

又三十二社徵考中に「諸書にくさ〳〵沙汰すれど、皆俗巫の說、或は浮屠氏のさたにて、更にとるに足らず」とあるが、誠に至言であると謂はねばならぬ。

こんな强固な說て破らされて居ても、所謂蛙の面に小便で、禪宗坊主でも、法華坊主でも、眞言坊主でも、其他各宗の坊主が、人心を僞瞞して虛搆の那精狐を賣つたり使つたりして居るのである、宜しく覺醒して邪より正に進むやうせなくてはならぬ。

東京に氣狂病院を出して個人で盛大にやつて居る我利々々亡者があるが、拾萬圓金が出來たら鳥居の額を文錢てあげると云ふ心願をして穴守稻荷に祈願をこめたところが、穴守稻荷から狐を使ふ秘法を敎へて貰つたとか云ふことで、金も出來鳥居の額もあげたが、種々なる災害があつて出來た身代も過半失くしてしまうたのである、……がそれは餘りに金を蓄めることにのみ心くらんで、親子間の情愛も無視して、たゞ吝嗇にのみ走り、一錢の金も親に與へるが惜しく、金の前には何物もないと云ふ心理狀態であつたから、世間からは鬼權高利貸のやうに惡く云はれても恬として我不關焉で居たのである、其不德義な不條理な行爲には何んぞ天が見のがして置くべきで、種々なる災害を受けるのは當然の事である。

元來狐は貪慾盛んなる者の祈るべきもので、又使用者も貪慾飽くなき者が多いのである、即ち花柳界の如きがさうてあつて、殆んど凡てが慾の外には義理も人情もな

いものである。

清盛は茶枳尼の法を修して一世の榮華を極めたことを盛衰記に載せてあるが、清盛或時蓮臺野で、大きな狐を追ひ出して、既に射殺さんとした時に、狐は忽ち黄女に變じ莞爾として笑ふて曰く、今我を射る事を止め助命してくれるならば、汝の所望を叶へさせてやると云つたので、清盛が汝は誰れであるぞと尋ねると、我は七十四道中の王であると云つたから、さては貴狐天王であるかと思ふて馬から下りて敬意を表すると、貴女はもとの狐にかへりて彼方へと行つてしまつた、それで清盛はつく〳〵と思案して。

「我財寶に飢へたる事は荒神の所爲にぞ、荒神を鎭め財寶を得んには、辨才妙音には不如、今の貴狐は妙音のその一なり、さては我陀天の法を成就すべきものにこそとて、彼の法を行ひける程に、又返して案じけるは、實に外法成就の者は子孫に傳へずと云ふものを、いかとあるべきと思はれけるが、よしよし、當時の如く貧者にてながらへんよりは、一時の富をみて名を揚げんにはとて、行はれけれども、さすが後世いぶせく思ふて、豫々清水寺の觀音を憑み奉りて御利生を蒙らむとて、千日詣を始めたり」

以上の話しを讀者は何んと見られるか、若し之れが虛構であるとしても、最も要領を得た虛構である、それは清盛の榮達が餘りに奇蹟であつて、又其末路が餘りに早かつたからである、……故に外道の法を修したとでも云はなければ、當時の人の理解心を滿足させる事は出來なかつたのであらう。

皇室を無視して勝手な振舞をした無禮の清盛でさへも、外道の法を行ふに躊躇したのであるから、其迷信を觀ても悲物であつた事が解るのである。

恐れられて居た茶枳尼使ひよりも、清盛の方が罪惡であり外道であつた、大納言成親も茶枳尼の法を修したが遂に失敗した、之を要するに、人間が狐を使ふと云ふことは、斷じて出來る事ではないのである、神主や坊主が人心を攪亂させる法として催眠

術をかけるのである、即ち催眠狀態となれば、思ふ事が必ず心靈上に狐のやうになつて體現するのである。

大阪で石岡と云ふ人の妻が、ナポレオンを聯想したら奈翁に似た赤子を產んだではないか、頭の毛迄奈翁と同じであつたと云ふことである、況んや迷信に耽れば二重人格になつて、狐の體現となり、行者が狐を使ふと云ふことに引き附けられて、行者の自由になるのである、靈狐は實に此の間の消息を眞によく解決するのである。

七　誤れる狐明神の勸請

豐太閤が木下藤吉郎と云つて居た時、織田信長と共に熱田大明神に參詣した、信長始め其他の家臣が各出世安泰を祈つた中に、藤吉郎だけは左の如く合掌して祈りを捧げたとの事てある。

「天下大亂、國土大變、萬民大苦痛ヲ祈リ奉ル」

と熱心に祈つた後、十度手を拍きそして雀躍して退いたとの事であるが、其の後十年目に天下を執つたとの事である、織田信長は寺を燒き坊主を殺して有ゆる罪惡を作つたのであるから、それを援ける支配役は太閤の如き奇拔の者でなくてはならぬ、此の大亂の中に天下を執らふと云ふ心の祈りであつたらう、誠に快哉な話しではないか。

今の坊さんや神官などは、太閤の如き快哉を叫ばせ得る程の勇氣はないのであるから、虛構の稻荷などを祀りて御經料などをせしめて居るのである、誠に罪な話しではないか、日蓮宗の祈禱の上にも何々稻荷大善神などゝ勸請して、家內安全、五穀成就などを祈つて居るが實に笑止な話しである。

信者の二重人格の煩惱の迷執から、狐憑的躰現になつた、煩惱の玉子とも云ふべき、野狐勸請守護神を各家々に鎭めて、之れに毎月命日とか緣日だとか云つて供物を備へ、眞面目くさつて祈念をこめて居るが。

雜亂勸請は佛敎にも戒めてある、即ち「一タビ一切ノ諸惡神ヲ禮セバ現世ニハ微

妙ノ法ヲ聞ズ、後生ニハ必ズ三惡道ニ墮チ或ハ蛇身ヲ受クル事五百生ナラン」

とある、其本文の虛實は兎も角として、其戒めの心を取つて研究すべきである、實基本紀には。

「心は乃ち神明の本主なり」

と敎へられてある、あらゆる神明も心靈を中心にせざればならぬ事を斷言せられたのである、又呑事書には。

「神人心ノ外ニ別請ヲ好ミ而シテ不淨ノ實執ニ從フ時ハ神地ノ上ニ踐ム事ヲ得ズ神地ノ水ヲ飲ム事ヲ許サズ而シテ五千ノ大鬼常ニ大賊ト罵ル」

とある（以上は神國決疑編の中卷に之を引く）……儒敎にも、祭るべからざるものを祀るは罪惡にして禀けざる事を云ふてある、而して祭るに道理あるものを祀るには。

「神を祭るに神在すが如し」と云ふてある、日蓮は又云ふ。

「神とは國主國王の崩御し給へるを生身の儘で祭るを神と云ふなり」と。神國王書に出づ。

然るに狐明神として虛構の神躰を祭り、人を惑はすことは如何なるものであらうか、余も亦祈禱研究時代には二三百の守護神を勸請した事があるが、或時石田兼五郎と云ふ桶屋の家內の勸請問題から、勸請が罪惡である事を自覺して、二三百の勸請札を悉く燒いて仕舞ふた事がある。

元來人間を祈禱して、其祈禱された人間が二重人格で言ふた事を、狐の障碍だと云ふて神樣に勸請するなどは、實に滑稽以上の氣狂である、行者が氣狂で患者が精神病である、字は異なつても結局は同じである。

既成宗敎の行者などは、心理學も知らなければ靈性の活動も識らないのであるから、狐が生靈になつたり死靈になつたりする樣に云ふて、之れを勸請したり施餓鬼をしたりするのであるから、根本の活動が判らないのである、或は幽靈なども天地間に浮遊して居る位に思ふて居るのであるから、狐を明神と勸請する位は何とも思はぬのは

無理もないことであらう。

野狐を明神に勸請するには、先づ心靈の解剖と即ち靈魂の解釋如何に立脚するのであるが、若し靈性を、原始人類の想像したるが如く、劣等なる思索に依つて解釋すれば正しき勸請は出來ない、野狐が身外より來たり或は身外に脱出して退散し往くなどゝ考へて居る行者や信者が勸請した野狐は全く屁のやうなものである。

若し身外より侵入し來るとか、身内より出て行くとかする事が、事實なりとするならば、先づ現代の心理學者に問ふて見るがよい、必ず否定するに決つて居る。ヘッケルが「若し心靈、精靈又は魂魄なる多樣の概念を狹義に解釋し、之を以て高等なる精神の活動なりとせば、吾等は我が人類及び他の哺乳動物に於ける心靈の器官を以て、大腦皮中フロネーテンを包括し、フロネマ細胞より構成せらるゝ部分なりと認めんとす」

こんな解釋は既成の行者や信者に解るであらうか、心靈は人間の身躰中に一つしかないのである、その心靈が眼耳鼻舌身意の六根から這入る他の侵入意識があるとして祈禱上躰現した心靈がある樣に云ふて、之れを勸請するなどは何と云ふても解らないことではないか。

然しヘッケルの云ふ意味の靈魂は、死後に於て永續せらるべきではない、ヘッケルは云ふ「此のフロネマが思想の器官たるは、眼が視力の器官たり、心臟が血液循環の中樞器官たると其意義相同じく、此の器官の破壞すると共に其活動も亦消滅するなり」と……

心身はもと不二である、内より見れば皆心である、外より見ればこれ皆身、身の生理的體制ありて心の活動はあり、此の身を離れて此の心はなく、此の心を離れて此の身はないのである、されば此の二者もとより分離する事の出來ないのは明かなることではないか。

死後此の身躰は壞滅して靈魂のみ存在すると云ふ事は何うしても推理し能はざる事

であつて、此の二者を分離し、靈魂のみを以て能く獨立し感覺し、思考し、行動する非物質的の奇態が演ぜられ得るとしたならば、それこそ奇も奇絶妙である、然し靈魂は存在するものであると云ふ思想は、長く世人の信仰を繫ぎ來つたのであるが、死は決して彼等の想像するが如き靈魂の脱ではないのである、即ち生活力の喪失である。

吾々が生時に於ては、我が身心は絶えず外界の作用に對して調整を試みて居るのである、食物の同化、老廢物の排泄、酸素の吸入、炭酸瓦斯の呼出、其他運動感覺等の作用を營める一定の體制を有して居るが、一度此の躰制が破れて、其活力を失はるゝに至れば、茲に始て死なる現象を呈したのであつて、後には何物もないのである。

然しながら體制破れて我と云ふ身體もなく、活力失せて心なるものも殘存はしないけれども、死は一切の終焉ではないのである、此の體制を組立たる原形質は依然として存し居るのである、我が形體は變化しても、しかも全く斷滅したのではない、物質の不滅なるが如く不滅に、勢力の恒存なるが如くに恒存である、體制は亡び、心の活動は止んでも、物と其力とは終に止むときはないのである。

吾々の身心の不滅はこればかりではない、親より子に、子より孫に、孫より曾孫にと云ふ樣に、順次に傳へらるゝ一種の繼續は實に吾等の身心を永久に傳へて居るのである、此の繼續せらるゝ內に因果律の制裁を受けるから病氣も起るのであつて、他から無意味の野狐などが憑依すると云ふことは、信ずべからざる邪義である。

故に狐明神勸請など云ふことは、絶對に必要のないことである、然るを狐が憑依するなど云ひ觸らして愚夫愚婦を誑かして居るのは、手品師が種を使はねば手品が出來ぬと同じ樣なものである。

憑依狀態は夢中意識である、即ち催眠的狀態である、決して一個の靈ではないのである、野狐が憑いて乘り移るなどゝ云ふことはどうしても信じられないことで、即ち妄信、誤信、邪信、迷信等の觀念が結晶して野狐憑きの心象になるのであるから、そんな虛妄の事を祭つて信仰したからとて何の役にも立つべきものではない、全く明

神に勸請するとは理由のなき事である。

元來狐明神を勸請すると云ふ事は非法である、正義を無視したやり方である、故に行者の終焉は立往生か、行倒れか、木賃屋ホテルの一隅で死去する位が關の山である、人間の精神內面に醱酵した狐精を勸請するは愚の極である。

「一切業障は皆妄想より生ず、衆の罪は霜露の如し、若しサンゲせんと慾せば端座して實相を思へ、慧日よく消除す」

此の如く、妄想より心的狐精を起して發言するのであるから、慧日の靈性を確認すれば一切の狐精は無となるのである、試に朝露を見よ、太陽の放光と共に直ちに消へるてはないか……慧日能消除す……とは、靈性の智水が、煩惱の狐精を照化して仕舞ふのである、……狐明神の勸請のみならず、鬼子母神や、不動や、摩利支天などの存在する事をも、認める必要を感じないのである。

以上述べ來つた事により、狐明神の勸請は誤れる思想であると云ふことが判明したであらうと思ふが、若しまだ判明し得ないとならば、試に狐明神を勸請した札や宮を糞壺の中に放り込んで見るがよい、糞壺中には何にが棲息して居るか、只ウジ虫を見るのであらふ、このウジ虫同樣に何の不思議もないのである。

安信、誤信、邪信、迷信等の結晶から、猶醒めることが出來ない者は、丁度ウジ虫が上にあがらんとしては落ち、上らんとしては落ちるのと同樣の生活に此の世を終るのである、靈性の大放光に接する事が出來ずに、妄想の糞壺中に一生涯を送ると云ふのは、何んと哀れなことではないか、只笑ふべきのみである。

あらゆる狐明神信仰者よ、先づ心內の改造を致せ。

八　狐の善惡見分け方

先づ狐憑者があつたら、女なら右の手、男なら左の手を仰むけにさせて術者の手の上に乘せて吹いて見よ、必ず小指がピク〳〵動く筈である、若し小指が動かなければ

狐憑ではない、小指が動くのは障碍脈とすれば腰より下の病氣となし、色情的に關係するのであるから、之れを陰狐と云ふのである、小指は腸の病、子宮病、淋病、梅毒、せんき、寸白等一切の病氣脈であるから、概して陰氣の病脈系である。

狐精に變化したのは食貪、金貪、色貪、名貪等云ふ、一切の貪慾から心理狀態が狐の樣になつたのであつて、他から狐が侵入して來たのではないのである、多くの迷信者は、狐が他から侵入して來るから、身體に觸れてザワザワするなどゝ云ふて、それを誤信して居るから言語道斷である。

又狐憑者を見分けるにクンロクと云ふ藥種がある、之れを二三錢も買つて火鉢で燃して見ると直ぐ判るのである、必ず臭いと云ふてあらう、さすれば狐精にチヤームされ居るのであるから、五指を吹いて見れば尙よく判明する、……病氣でなくて貪慾非道なる人は必ず小指が動くのである、即ち相場投機などで、人の金を奪はんとするのは、高利貸よりも業慾であるから、狐精神の貪慾心が小指に現はれ出るのである。

貪慾心あるものは必ず下部の病氣を患ふものである、色慾も一夫一婦であれば正道であるが、一夫多妻主義であれば色貪である、金貪が相場師であつて大食者が食貪、政治屋などは名貪である。

狐憑者は常にヲドヲドして何となく人が恐ろしいと云ふので、多く暗室にばかり居たがるものである、又物思ひに沈んで、人を見てはキヨロキヨロする風があつて、夏でも蒲團を三四枚も被り寢て居て外出せないのである、即ち先入觀念となつて泌み込んで居るため、之れを心外に取り去る事が出來ないのである、世間の精神病者は悉く狐憑であるから注意して見るがよい。

病院などに往つて見ると、窓口などに立つて居て「突然お前は何をして居るのであるか」と怒つて居る者があるが、これは氣狂になる前に、壓迫か脅迫かのために、心靈上に印象されたのが、窓につかまつて居る時に雜念が統一される刹那……あゝ口惜しいお前は誰だ……など云ふのであつて、夢中意識と同じであるから、發散する度毎

に病氣は輕くなるものである、之れを獨散意識と云ふのである。

余が祈禱研究中に、大森の喜德教會と云ふ日蓮宗の教會所で、毎日百人以上患者を相手にしたが、その教會所の娘で、中根いちと云ふ織工上りの女が、喜德稲荷が憑いて居ると云ふので之を祭り、その眷屬に保德稲荷だとか、藤吉稲荷だとか、云ふて各別々に祭りあげて、氣狂の集合所となつて居たから、一ケ年程余は入會して整理を行つてやつたが、余が退去後は遂に墮落して仕舞つたのであつた。

その狐憑の狀態は瞑目せる眼を明いて種々なる囈語を云ふのであつた、此の憑狐者に魅化されて居た者は千人位もあつたであらうが、余は何時でも集合の時は迷信打破を絶叫して「人生の妖怪化」を叩きこわして仕舞ふ積りであつた、其時彼等が行ふて居た方法を一應述べて見ることにせう。

「どなたです、この肉體に憑いて居るものは」

此の暗示にかゝるのを見ると直ちに何等か開口する、「私は穴守稲荷の三番目の眷屬です」と行者に答へる、すると行者は直ちに再問する。

「此の肉體の口をかりて名乘る穴守さんの眷屬は何處に住んで居るのですか」

「宿なしです、人の心に住んで精氣を吸ふて居るのだ」

「何年位前から憑いて居るのですか」

「二十年前から憑いて居る」

「それでは生れた時から憑いて居るのですか」

「そうだ……」

「何故生れた時から憑いて居るのですか」

「母親の心が惡いから生れる時に憑いたのである」

「母親の心が惡いとは、どう云ふ心が惡いのでしたか」

「此の子供が生れたら女子なら殺して仕舞ふと云ふ惡心があつたから、男の子が此者に產れたのだ」

「それではお前さんは誰れに頼まれたのですか」
「誰にも頼まれないが母親の心の中に住んで居るのだ」
「母親の心の中の何處に住んで居るのですか」
「心の中と云へば心の中である……ウー……」
「それでは心の中にどんな形式で住んで居たのですか」
「催眠意識と云ふ處に住んで居たので穴守の眷屬で家なしです」
「母親が穴守稲荷を祈つた事がありますか」
「あるとも、あるとも、毎月參詣に來て相場の當ります樣にと祈つて居た」
「相場で金を儲けさしてやりましたか」
「心がけが惡いから儲けさせない……」
「穴守の三番目とはどう云ふ譯けですか」
「それは出馱羅目である……」

「出馱羅目を何故云ふのか」
以上の如くに喜德狐憑のいちが、患者を調べて居るうちに、患者は言がつまつて口がきけなくなつたのである、而して眼をパッと開いて女行者の顏を見て居たのである。
こんな問答は患者の妄想の發意であつて何等の根底がある譯ではないのであるが、行者も患者も妄想とは思はないから、狐が毛穴からでも身の内に這入つて居て、談話をするのである位に思ふて居るのである。
而して保德稲荷を掛合事に使用するとか、藤吉稲荷を產婆に使用するとか云ふて、人々に宣傳して居たから、余は全然之れを非認して叩きこわしてやつたのである、眞の靈狐には何んにも名などはないのであつて、何事でも自由活動をするのである。
狐憑者は必ず開口一番……此方は何々明神だと云ふ豪さうな口調を發する、質問すると其方が……と云ふ樣な口調である、疑ひもなく正氣を以て云ふのではなくて、氣狂の口調であることは明かである、或時いちと云ふ行者が、夜中突然……火事だ……

と飛び起きたのであるが、本人の眼は据つて血走つて居た、……本人を渇仰して居る者は喜徳稲荷が乗つたのであると云ふて居た。

余は本人の背中を三ッ程強く叩いてやつたら、其所に倒れたのである、そして其まゝ寢についたのである、翌朝本人に質問したら何にも知らぬと云ふのであつた、之れは日中湯殿の所に石油鑵を置き忘れたのを氣にかけて寢に就いたのが、心靈に全精神が統一される時に突き放される爲に……石油鑵が變じて火事だ……と云ふ口調になつて叫んだまでゞあつて、つまり世間で云ふ火事の夢を見たのである。

狐の善惡見分方と云ふと、何んだか狐が人間に憑く樣に思はれるが、實際は狐憑心象の見分け方と云ふ方がよいかも知れない、今一歩進むと狐とは個であつて、個人主義の人心の見分け方と云ふてもよい、その個人主義とは左の如き例がある。

「余の知人の家に飯炊老人が居た、禮儀作法の心得もなく、主人の茶碗で水をガブガブ呑み、主人の箸で食物を食ふ、下女が見兼ねて「おぢいさん、それは旦那樣のぢやないか」と注意すれば、ぢいさん一向平氣で、「旦那樣とて乞食ぢやあるまいし」と云ふ風である……個人を尊重した氣分は自己中心である、即ち大義名分がないから狐精を帶びて居るのである。

又こう云ふのがある、無斷で他人の石鹼を使ひ、或る人に怒られたら、石鹼は菩薩だから使はれて人の垢を落すのである、石鹼の本義を盡して居るからよいではありませんか。

又或人客に來りて象牙の吐月峰を出され、烟管でカチンとはたきたるに、主人思はずハッと云へば、客は平氣で「御主人御心配下さらずとも大丈夫、烟管は何とも御座らぬから」と云ふ。

今の時代は此の個人主義を、萬事表面に現はす故に、少し相違すると直ちに狐疑心を出して貪欲を熾んにするのである、こんな狐疑心も、狐憑の本性を示して居るのであるから、靈狐の使用を徹底すれば心身の改造が出來るのである、心の海に波が荒立

つとそこに狐あり狸あり犬神あり天狗あり蛇靈あり生靈あり死靈ありであつて、幻覺、錯覺、妄覺を示して靈狐の光明を蔽ひかくすのである。

狐憑に水を飲まして酒と云へば、顏が赤くなつて酒を飲んだ時の樣になるものである、酒を飲ましても酒臭くない、水を飲ましても酒臭いと云へば其通りであるから、一寸妙のやうであるが、それは一種の精神的作用であつて、丁度催眠術にかゝつた者に、水を與へて藥であると云へば飲みにくい顏をなし、苦い藥を與へて甘い砂糖水だと云へば舌鼓打つて飲むのと同じで、暗示に基づく精神の作用である。

故に確固不拔の精神を養ふて、貪慾心より起る狐精を擊退する樣にせねばならぬ。

九　狐憑退散法の原理

狐憑を治すのに古來祈禱の精神療法があつた、憑狐者の偏執を打破して第二人格を第一人格に復歸させるのである、されども若し其の祈禱に對する信念の薄き時は彼れの心を服する力足らざるため、之れを治す事が不可能である、然し狐憑などになるものゝ常として、祈禱を信ずるの念も亦篤いものであるから、其効を奏する事も多いものである、が然しかゝる手段を用ひずとも、余は憑狐者を數多治してやつた例證が澤山あるから、今之れを左に上記することにせう。

穴守稻荷の附近で漁を業とする者の悴で、十五才の男子があつたが、或る神官の祈禱に依つて憑狐狀態となつたから、余は一喝のもとに之れを治してやつた、即ち兩手を仰向けさせて余の拇指と他の四本の指とで上下から强く壓して置き、本人に對して「エイ」と一喝氣合をかけたら、指先に神官が狐を憑たから……と云つたから再び一喝したらば、それで三ケ月も入院して居たのが、二度の氣合で治つたのである。

又昔時清水濱臣の「泊々筆話」には左の如き退散の記事がある。

「橘の直枝は(中略)巽の角に稻荷の祠あり、直枝、思ふに祠こゝにありては家造り

せんに便利あしく、所をかへばやと思へど、今までかく有り來りし事なれば、すておきぬ、かくて日頃經るに朝夕好み飼へる小鳥、ともすれば失すること幾度と云ふ事なく、いといぶかしき事に思ひたるに、或る朝小鳥また失せたり、こめおける籠も碎けぬ、直枝いよ〳〵いぶかしみて、庭の中此處彼處見めぐり見あるくに、稻荷の祠のあたりに尾羽散り亂れたり、直枝怒りて、年久しく使ひならせる老奴を呼び、とも〳〵に祠を取り除けつゝ見れば、狐の住所と見えて穴あり、親狐は居り合はせずして、生れ出でて二日三日を經つるばかりの子狐三つ四つ居たり、直枝怒りて、憎き奴哉、小鳥失せたるは此の親狐が仕業なりけり、此子狐ども疾く取り捨てよとて、彼の老奴をして此の狐をみな近き川に流させ穴を埋め祠をこぼち燒きすてさせけり、しかるに其夜より彼の老奴、心內ぬるみほとりて物狂はしくなり、えも知れぬ事ども云ひさけびて、あな憎くき此の老奴や、わがいつくしむ子どもを流し殺して、我が棲む所をこぼちしことよ、いかにせん〳〵、今宵を過さず取り殺してんと大聲にさけぶ、直枝は聞つけていよ〳〵怒りさけびつゝ、彼の老奴に向ひて言ふやうは、狐よ、汝こそ理なけれ、此處の居處は公より直枝に下し給へる所なり、直枝はあるじなり、されば祠をおかんもおかざるも直枝が心なり、其のあるじの好み飼ふ小鳥を奪ひ食むは盜人なり、やよ、ことわりなのくち狐よ、子狐を流し捨て祠をこぼせしは直枝がさせしなり、老奴が心よりなしゝにはあらず、うらめしと思はゞ直枝にこそ訴へなげかめ、老奴に何の怨み心を殘さむ、放れよ、さらずはなほいみじきめをみすべし、と責めければ、ことわりとや思ひけむ、やがて放れにけりとぞ、其をゝしき本性此一事にておもひやるべし」

と記されてあるが、之れは老人の奴僕が弱き心に狐害を受くべしとの觀念强烈となりて、終に憑依の狀態を生じたのであつて、即ち觀念が凝結して催眠的狀態を現し、無意識裡に口走る樣になつたのである、然るに直枝の强き心に制せられて、此の觀念が分散して脫退する事を得たのであるが、……斯の如く憑依者の多くは心弱

きもの、迷深きものに現ずるを常とするのである。

狐憑の消散原理は科學的に分別しても容易に解釋を加へ得るのであるが、それかと言ふて直枝の老奴如き憑狐のみではないから、狐憑者の狀態をよく直感して、その原理を我靈性の鏡に照して活斷せねばならぬのである。

余は狐憑者を審判する時には、必ず其稻荷の宮或は境内の立木一切を仔細調査して書きつげ置き、審判なり、壓迫なりの時に、その道理を强言的に理解させ、少しは憑狐者の意に落入つた樣子を見て……エイ……と大喝一聲氣合をかけて、手刀にて切り込む事をするのである、……手刀とは人指中指の二本であつて、あとの三本は拇指が上になる樣に握るのである。

世間の幽靈談には多く虐殺等の怨恨が伴ひ居る如く、憑狐者にも多く幻覺が伴ふて居る……心裡の幻影……それが發して外にあるが如く感ずるのである、淺草の某寺でこんな事があつた、某寺の主人が後妻を迎へたが、其後妻の連子に娘が居た、然るに後には其娘が養父と通じて實母を虐待した、實母は痛心の極遂に病氣となつたが、無道にも之れを二階の物置部屋に入れ、食事さへも充分に與へずして、不倫の親子は少しも之を顧みず、死ねよかしに取扱ひて居た……憤怨の極……後妻は終に經死を遂げたのである、然るに此の虐待は心强き夫の心に印する事は淡かりしも、心弱き娘の心には……さぞ吾を怨みつらんとの觀念……深く心にきざして、夜陰に至れば「あれお母さんが」と言ふ聲と共に、何者にか二階に引き上げらるゝかの如く駈け上りて、バタ〳〵と落ち、自ら亡母の恐ろしき姿して我を引き上ぐるの幻覺を生じ、夜毎に其悲鳴を聞きし附近の人より聞きし事がある。

祈禱者は母の祟りなりと言ひて讀經供養に赴くが、心理學者は一の幻覺として料理する、共に徹底した斷案ではないのである、……虐待したのは業引でもなければ、本能の發動でもない、坊主の妻が死んで後妻を入れたのが因であつて、坊主の色慾に引して獸的なりしが原である、此の相對間に起りし因果律にして、即ち佛敎で言ふ末那

識と云ふ、催眠狀態的意識の相擊によつて起りたるもので、奥底には曇りなき心靈が照り輝いて居る事を識らぬが爲である、坊主の罪惡が一人の犧牲者を出した譯である。

狐憑退散の原理も之れと楯の兩面である、藝者を狐と言ふ、之れを家庭に入れると必ず百中の九十九人迄は波瀾を起すのである、藝者上りの妻を帶した家庭で姪と爭鬪を起したものがあつたが、その間の心理狀態をカメラに撮つたら蛇心、蛇身の焰の如き現象が三本も出た者がある、……狐憑者も之れと同じくカメラに撮れば、憑狐者の心理狀態が分裂して憑狐の後方に狐の躰形が映寫するのである。

熊澤と言ふ武士が狐憑を退散させた事が昔から傳說になつて居るが……狐憑に向ひ突然問ふて曰く、論語の中に曰と言ふ字が何個あるか……と憑狐の娘に迫りしに、何の答へもなかつたので、大喝一聲して大刀に手をかけ拔打にせんとせしかば、此の觀念が延長して娘は仰むきに倒れたのである、倒れて七日間程熟睡して覺醒し眞人間になつたのである。

家に歸つて弟子共より、先生論語の中に曰と云ふ字は何個あつたのですか、と問はれて熊澤が、已れも知らないのである、何個あるか調べて見よと言はれて弟子がその狐憑退散の意義に應用した事が判つたが……其の原理は弟子には解らなかつたのである、水戸光圀卿も九寸五分を拔いて斬らんとする形式にて狐憑娘を治した事がある。

狐憑は催眠狀態的意識の分裂作用であるから、心靈に基調すべく、心靈より壓迫か、理解か、頓智かを以てすれば必ず退散するのである、即ち催眠術の暗示法がそれである、紙を石と言ひ、石を輕い紙と言ひて劣等意識の轉換を期待させるのである、其巧拙は術者にあるのであつて、憑狐者は別に古いも新しいも關係せぬのである。

術者の家に這入る時に突然……何だ何用あつて來た……と大喝一聲やること、……術者の家より立歸らんとする刹那に大喝一聲又壓迫するのである、狐憑は前にも言ふ如く末那識即ち催眠的意識の自由活動であるから、狐憑者の狀態を察して緩急よろしきに致すのが術者の熟練にあるのである。

靈狐を使用するには、是非狐退散の原理を心得ておかねばならぬのである、記憶して置かぬと普通の狐憑や、劣等の催眠術や、太靈道の眞靈顯現の靈示などゝ混亂して仕舞ふからである、……「氣合術の江間式などは、六根を一喝で奪ふて七識を引張り出して、自分が化物になつて或は狐憑になつて追ひ出して仕舞ふ」などゝ言ふ愚劣極まる言語を吐いて居る。

狐憑だの死靈だのを退散させる原理を識らないで勝手な事を言ふて居るのが現代の靈術家である、古い祈禱や狐狸使ひを改造すべく生れ出たと言ふ、靈術賣捌人が、かへつて劣等な事を言ふて居るには呆然たらざるを得ないのである。

狐憑が死靈生靈を裏にして、表が狐精の躰現して居る者も澤山あるから注意を拂はねばならぬ、先づ如何なる狐憑を退散させるにも、靈障脈を五本の指で吹き分けてから確定して置き、如何なる靈の系統かを調べてから大喝一聲すればよいのである。

それから外部の印象から來て居るのもあるし、傳統的に印象して居るのもある、繪畫を見てからそれが印象されて居るのもあるし、伽ぎ話しから先入主となつて居るのもある、又夢で見てそれを信じて憑狐になつて居る者もあると云ふ風で、其原因は種々樣々で一樣でないから、凡て一律には往かぬけれども、先づ催眠的意識の二重活動として取扱ひて教化せねばならぬのである、而して其原理は大凡以上述べ來つた事柄によつて了解されたであらうと思ふ。

十　科學上より觀たる靈狐

前來述べ來りし所論は心靈科學より萬事を說いて來たのであつて、世間普通の科學からではないのである、心靈のバロメータで力說したから從來の狐使ひとは天淵の相違である……世間の淺薄な科學で靈狐を研究すれば、その歸着點が判らないであらうが、心靈科學より研究すれば條理整然として分別されるのである。

世間の科學は五官に觸れる丈しか解釋が出來ないのであつて、五官以上の事は科學

が關係すべき場面ではないのである、然るを無理に心靈科學だなどゝ云ふてコヂツケて居るから、高等心靈科學上より見れば實に哀れなものである。

普通の科學より靈狐と云ふ問題を觀れば、研究の結果は無と云ふことに歸するのであるけれども、心靈科學より靈狐を觀れば必ず本躰に到達する事が出來るのである、元來科學と信仰とは其根本に於ては合致して居るのであるけれども、宗教家と云ふ一種の偏執性を維持した人々は科學を無視して顧みず、科學者は宗教及信徒の信仰狀態を蔑視して居るのであるから、共に相合致して向上を計ることが出來ないのである。

科學と迷信……それは丁度晝と夜との如きものであつて、お化は昔から夜出るものと極つて居る、電灯が次第に行き渡るに從つてお化か少くなつたと同じ樣に、科學的研究の領分が擴まるに從つて、迷信も自然に消滅に歸すべきものであらうから、殊更に迷信征伐などをやる必要もなからうし、事新らしげに科學と迷信などを論ずるのは寧ろ時代錯誤であるかも知れないが、それにも拘らず科學上より觀たる靈狐……などゝ云ふ問題を出すのは……靈狐の妨害となる雜多紛然たる迷信がなほ存在して人心を毒して居るのであるから、それを一掃したいと云ふ考へから本問題を出した次第である。

文明だ開化だなどゝ誇つて居る現代に、日々の新聞紙上を見れば、九星方位を掲げて迷信を誘つて居るのである、即ち九星判斷が現に社會の大部分の人々に信ぜられて居るためだと見なければならない、又大本教などにも智識階級の者が數多迷信に歸依して居るし、豫言や透視や、星占や、卜筮、神託などゝ、是等を信ずる人も亦智識階級に少なくないのである。

學術の進歩、文化の普及と共に漸次に減少すべき筈であるにも拘らず、多くの迷信が今日に至るまで尙存在し、而かも近來に至つては却て幾分增進せる傾向あるが如く見ゆるのは、實に情ないことであるが、大戰後の人心不安なる欠陷に乘じた事と、大震災後の不安に對する迷信が胚胎された爲めであろう、迷信の中には吉凶禍福を目的

としたるものが大部分を占めて居る樣であるが、科學上より見れば、如何にも無理なる迷信的注文であつて、凶を變じて福利を求めんとする其願望は是非ないことでもあらうが、迷信によつて救はれんとするの愚は實に笑ぶべきではないか。

商人を說くには算盤を以てするが如く、吉凶禍福を問題にせる迷信家に對しては、先づ說くに利害を以てすべきであらう、故に靈狐なる名稱に依る使用法の如きは、既成の迷信家が、今迄行者や坊主などに僞瞞されて居た者を、眞に靈的現象にある處の……靈境に直感して迷信が正信と變ずるのであるから、科學に笑はれて居た迷信が、靈狐を認め得る樣になると科學の缺陷を補ひ得ることになるのである。

●由來科學と迷信とは、明暗正邪全く相反するものゝ如くであるが、迷信にして吉凶禍福を問題として居るものは、其目的に於ては全く科學と同一であると云はなければならぬ、科學は畢竟組織立ちたる方法によりて周圍の世界を研究し、合理的に吾人の福利を增進せんと努力して居るものに外ならぬからである、科學は云ふまでもなく、迷信を敵とし、これを絕滅せんことを期して居るのである、が然し、迷信家は決して科學に背いてはならぬ、先以て科學研究の結果を聽くやうにしなければならぬ筈である。

思想の變調は人心の變動となり、人心の變動は擴大されて宇宙の大變動と表現して、大震大火災等となる、と云ふことは科學者には判り得ないのである、靈狐は科學の題材とする偶然の現象なるものを解決することが出來るのである、即ち迷信征伐の十字軍は靈狐の公開であるのである。

靈狐は人間の眞靈の活躍であるが、人間は靈狐だなどと云ふと、外界より侵入したものであるかのやうに思ふて、……狐使ひが……と早合點をして仕舞ふのであるが、誠に憫れむべきことどもである、人間を解剖して見ると一番よく解るのである、人間の頭の頂天から足の爪先までの骨の數は二百四十六個であると云ふ事は誰れでも識つて居ることであるが、この骨の中に一貫して居る靈なるものを認めるには餘りに兒戲

的であるから、此の靈なる一種の正命躰には未だ曾て觸れた科學者は一人もないのである、否な一貫したる靈などゝ認めることが出來ない故、地震等の現象も自然的發動であると結論するより外はないのである、然しながら其生命體をして、眞の活動をなさしめ、眞の理解を與へ得べきものは眞靈の働らきである、即ち靈狐の威力であるのである。

人間には慾情と云ふ惡魔がある、又一方には大悟徹底すると大偉力ある靈性がある此の二つの相が具體化されたのが靈個の活作用に依つて萬事判明するのである、釋尊は慾情を靈性化した大覺者となつたが、靈性を慾情化することをしなかつた爲めに、末世の者共が迷つて五十八宗などに分裂して了つたのである、靈狐は實に靈性の慾情化をする一つの方法なのである。

女を形體より見ないで內面から觀察するのが靈性の慾情化である、昔の祈禱上の口傳とか、秘傳とか云ふとなんだか有りがたさうであるが、靈狐の口傳は何もありがたい事などは少しもないのである、本來あり得可きものであることを知らないから、それを知らしむるまでの事である。

三千年前の釋迦は、靈狐の本體を認めて居たから、種々なる名稱に依つて之れを力說し、末代の人類に敎へを垂れたのであつたが、惡僧や愚僧が出て、靈狐の光りを蔽ひかくして仕舞ふたのである、釋尊が惡魔を降服させて一元の靈境に融合させたのが靈狐であるから、諸氏も靈狐を認めてそれを體現すれば、釋迦同樣になれるのである。

余も十年間苦修練行の結果靈狐を確信して、その靈狐の自由活動が、科學にて調理が出來ぬと云ふ事は解したが、靈狐の本體に到達するまでは科學のお世話にならなければいけないと云ふ事を認めたのである、日蓮も斷頭場裡に於て靈狐の本體に觸れたから、大神通力を示したのである。

「日蓮と云ひしものは、九月十二日子丑の刻に頸切られて終つたが、靈狐の本體は北國佐渡に往つて安全なり」

と靈說されたのである、親鸞の範宴は靈個の偉大を認めることが出來ないで慾情化されて仕舞ふたのである、範宴が二十六歳の正月、新春の回禮を終へて、京都から叡山に歸らふとするとき、修學院村の赤山神社に於て、美しい若い女に出遇つて、その女から「古來の佛敎が女性と云ふものを無暗に虐待して居るのは實に怪しからぬ」と議論を吹きかけられて弱つた、と云ふ口實を設けて……妻を得んが爲めに……妻帶を自由にして慾情の靈性化の樣に見せかけ、末代の人を僞瞞したのであつた。

否、末代の人などはどうでもよい、自分即ち範宴さへ妻帶すればいゝのであつた、然るに其眞意を知らずに、誰れもが此の問題を格段に偉いと云ふて居るから、親鸞を信ずるものは悉く助平連即ち戀愛は神聖なりと云ふ理窟をつける者のみであるやうである、京都だの名古屋の眞宗の尼が、自由淫賣で墮落して仕舞ふことは、能く人の知る處であるが、京都の或信者は此の醜事を知つて眞宗を中止した者もあると云ふことである。

靈狐から之れを見れば、女も男も區別はない、悉く同じ靈個であるが、佛敎では女人を救ふためには非常に苦心されたのである、即ち女は地獄の使ひと云ひ。（唯識論）には。

「女人は地獄の使ひなり、永く佛種子を斷つ、外面は菩薩に似、內心は夜叉を好む」と云ふてある、與へて云へば親鸞の範宴は、佛敎坊さんの肉食妻帶問題を解決したと云ふ丈けである、科學上より之れを觀れば、何んでもない事であるが、それを彼れ是れ後世の人が愚痴の請賣をするのである、法華經に「甚痴也矣」と五百弟子授記品と云ふのに出て居るが、自分に偉大なる靈狐のあるのを識らず、乞食して居る愚者に敎へたと同じである。

科學は五官能丈を萬事滿足させればよいのであつて、七識以上八識乃至絕對の靈性に五官能を基調させて、靈狐として大神通を出させる事は出來ないのである、然し心靈科學からすれば可能なるは必然的である。

心靈科學は理論ではなく實行であるから、靈狐口傳を徹底すれば、何事も自由自在に應用が出來るのである、然して靈狐を傳へた連中が、昔時から數多あつたのであるが、それは靈狐でなくて、零狐であつた、眞の靈狐は外道の法ではない、普通の靈狐は外道的であるから、氣を附けないと混交してしまう、日本の傳敎と云ふ坊さん丈けは、眞の靈狐を心得して傳へて居るが、餘人は之れを知らなかつた、その證據は、古老の傳に

「この荼天の法は、東寺と三井寺とに、委細に相傳して山門にこれなし、其故は山家御相承ありけれども、相輪塔の下に此法と禪法とは埋められぬ、仍て天臺流には賞翫せずと申し傳へたり、黑谷流には代々相傳して秘藏す」と（溪嵐拾葉集九）

に出て居たが、概して弘法以來傳へたらしい、稻荷神社考下には、文德實錄仁壽二年二月、越前守藤原高房傳を引いて、天長四年の春、高房が美濃介を拜したとき、席田郡に妖巫が居て、その靈が暗い所を轉び歩いて心臟を食ひ、その被害者が非常に多かつたが、昔からの役人は皆恐れてその部落に入る事をさへしなかつたのを、高房は其同類を捕へて酷刑に處したと云ふことである、それは荼枳尼の所業であると云はれてあつた。

心靈科學が公開される樣になると、昔時からの狐精問題や、僞瞞的靈狐問題は一掃されて仕舞ふのである、心靈科學より之れを見ると、實に一笑にだも値ひせざることである、（南嶺子四）に云ふ

「人として獸や食人鬼に手をつかへ中略吉凶禍福を狐にまかする徒、まことに悲しむべし、金銀は野狐の細工に成るものにはあるべからず中略僧侶狐の力を假りて加持祈禱し、憑をたて、幣を搖かす、是僧即ち狐の同類なり、……釋迦如來一代の諸經に野狐の力を假りて祈禱せよとありや否や、かりそめの病人をも人のうらみと名づけ、生靈の托しぞ、死靈か云ひしぞとおどしかけて狐をつかふ、其僧心をとはばいかが答へん、經力にてさやうの事もいのらるゝならば、何ぞ狐の力をからんや、各々そ

の宗の經までも人にいやしまれ、狐の力にて不思議をなさんとするは、狐よりつかはると云ふものにて、人面獸心、それこそ獸より下につく可きものか、人としてけだものゝ下に列するさへあるに、是をたのみて信ずる徒は、けだものより二等下につく可きぞ」と

誠によき訓誡である、是の如き科學的斷案は、心靈科學に來つて一層光明を發し「吉凶禍福は靈狐を確認するその日より絶對の靈威に吸集されて一元の靈個の力にて無意識に發達する事を認識するのである」と斷言する事が出來るのである。

南嶺子が「金銀は狐の細工に成るものにある可からず」と云ふ事も心靈科學よりすれば「寶に足なし自ら來らず」故に「求めよ、さらば與へられん」と云ふ事になつて、眞の靈個を認めると同時に……無意識の活動……は軈てその善果を芽し來りて快哉を叫ぶ事になるのである、南嶺子の云ふ如く「釋迦如來一代の諸經に、野狐の力を假りて祈禱せよとありや否や」とある如く、心靈科學よりも加文して「釋尊は靈個の自由活動を說いたのであつてそれ以外は一字不說であるから、既成の狐精的問題は全然放棄せねばならぬ」と斷じ置くのである。

又南嶺子が「狐よりつかわるゝと云ふものにて、人面獸心」とあるは、實に痛快の言辭ではないか、心靈科學より加文すれば「昔の狐使ひも、今の狐使ひの行者や神官は、重罪犯を毎日犯し居る者故、國法を以て處斷し、中止して日本民族の現神思想に復古せねばならぬ」と斷ずべきである。

又南嶺子の「是れをたのみて信ずる徒は、けだものより二等下につく可きぞ」とあるが、心靈科學は加文して「ダーウインの如く、猿の變化したる狐の同類故、人間が劣等動物に墮落したのである、故に國外に放逐すべきである」と斷ずるのである。

十一　靈狐の口傳

前來述べ來たつた事柄によつて、靈狐なるものは、昔より傳說されて居る樣な野狐、

邪精狐、七狐、白狐、金毛九尾狐など云ふ狐が居て、人間以外に存在しつゝあるかの如き説とは全然違ふ事が了解されたであらう、……然して又昔から神々の降臨とか、示現とか、影現とか云ふて神德を説き來つた事も、靈狐の口傳に於ては絕對非認すべきものであるから、之れも承知して置ねばならぬのである。

大本敎などで「二十六年一日の如く」とか「神命一下すれば夜半と雖も起座して筆を執る」とか云ふて居るのは邪狐精である、靈狐の本義は、人間が社會の怒濤中に突進せんとする時に必要なるものであつて、先に進んで先に成功すると云ふのが其大目的である、氣狂の狀態になつて仕舞ふやうな邪狐精とは全然違ふから心得置くべきである。

靈狐を使用するには、七ケ條の口傳があるから暗記して置かねばならぬ、左に之を示す。

(一)先づ古い祈禱及び信仰狀態から一切脫却して、生れたばかりの心持ちになつて、何事も胸中に思ひ浮べざる事。

(二)自分一人で靈狐を行ふ事と、人に行ふ事と二樣ある事を記憶する事。

(三)靈狐の通力で自分の病氣を癒す事と、人の病氣を治す事と、遠方の人の病氣を治す事とを記憶する必要。

(四)靈狐實行以後にその秘密を人に語らざる事と、人より聞かれても靈狐の意義を知らざる者に話さゞること、及び施法の時人に見せざる事。

(五)靈狐實行は何時でも差支ないが、一大事の事には朝二時がよい、普通の事は何時でも靜かな室で行ふが宜しい。

(六)靈狐實行は古き祈禱の概念は少しでも浮べては不成功に終る故決して浮かばせない事、又神前や佛前にて行はぬ事。

(七)靈狐は前にも述べた如く、他より侵入して來る靈でない事を確信して座にも就き、又被術者も座せしめねばならぬ事、且又概して惡人征伐と自己の進退を決する一

大靈術たる事を確認する事。

以上の七ケ條が會得がいつたならば、其内容を左に示すから、能く〳〵心得て置て靈法を修得すればそれで宜しいのである。

第一の……先づ古い祈禱及び信仰狀態から、云々……何事も胸中に思ひ浮べざる事。

古い祈禱で左の如く云ふて居る樣な迷境は斷然意に置かざる事（中山行者の迷謬）

「攝州能勢妙見山と云ふは、往昔よりの靈所である　中略　先年或婦人が瀧行中一夜夢に吾れは白瀧明神である、汝を守護し取らせるとの御告があつた、すると翌日の白晝瀧に水行して居る最中に美し稚兒姿を以て顯はれ姿を見せた、依つて修驗者が之れを調べると、何うしても疑ひの無い程理も詰んで居たので、其人は瑞喜の涙に咽び」

以上の如きは前述した古い祈禱の迷境であるから、こんな說に僞瞞されてはならぬ、白瀧明神と云ふのは、能勢妙見山の守證神として五百年程前に現はれたと云ひ、その

原は下總國飯高檀林の守護神であつたと云ふてあるが、それは僧侶から信者に誤傳された迷信觀念の二重活動であつて、妙見もなければ白瀧もない有名無實である事を知り得ればよいのである。

第二の……自分一人で行ふ事と、他人に行ふ事と云々……と云ふのは

先づ自分が靈狐の靈力を體現して見たいと思ふたら、毎夜二時に起き三七日の間、合掌閉目、精神統一をするのである、一時半より二時半迄位略一時間でよいから、正座して合掌せねばならぬ、而して此間無念無想、唯自己の本體である靈の本性を常識が認める事を追念するのである。

右の如くするの準備は、鼻息を數へて居る內に、自分の身體がピリリッと電氣がかゝつた樣に振動を起して來る、その振動が體現すると心靈上の雜念が靈の本體に統一されて、自我、利己の分裂の念が無となつて靈個の本體に合致した眞境を實現する事となるから、自分が目的とする事件を追念して見るのである、必ず閉目せる眼先に展

回して來て目的事の何等かを誘發し指導する事になるのである。

初めの内は心臟の皷動が判明して居るが、だん〳〵進んで行くと統一された心内の大靈に融和されて、何とも云へぬ精神狀態を現はすのである、病氣の時は一切の病氣は恢復して無病健康の身となるのである、心靈内が光明赫々として身體全部に放射能作用を起し、心身の調和が出來て、自分の肉體が靈化されるからである。

右の如く毎夜一時間づゝ二十一日間精神統一を實行すると、二十一日後には以前の精神上と大なる差別を生じ、三七日前に判らなかつた事が、二十一日後には能く判決され得る樣になるものである、是れは古い昔の話しの如く、二十一日間絶食して不動樣から大劍を貰らふたと云ふ祐天などより遙かに超越して居るのであつて、偉聖日蓮が二十一日間虛空藏堂で絶食し、凡氣、邪氣、慢氣等の意識の分裂作用を靈狐に統一させた樣に成り得るのである。

昔の研修法は苦行であつたから、平凡の人間には容易でないと思惟して居るため、多くは面倒の事として修法を行ふものは至つて稀れであるが、靈狐口傳の獨修法は單刀直入的であつて、毎夜一時間だけ二十一日修行すれば、靈狐を認め得るのであるから至つて簡單である、而して此の靈狐は、傳說の如き個體ではなくて「之れを擴ぐれば六合に充ち、捲げば密に隱れる」と云ふ絶對無限の本體であるのだから、閉目合掌して居ても餘程注意しなければ判らぬのである、靈狐には金毛九尾の如き動物性の毛光を云ふのではなく、光明皇宮の玉體に放光した樣な光素を備へて居る本體である。

然し一人に二靈あるのではない、勿論依憑狀態でもない、況んや祈禱上の障礙などでは尙更ない、あらゆる神理、佛理を超勝した一元の本體であるから、體現後は一切の宗敎上の觀念に超越して居る實際觀である。

それから他人に施して靈體を體現させたいと思ふたら性質の純なる者を選びて毎日時間を定め、午前でも午後でも宜しいから施行するがよい、然して本人に靈個と云ふ

ことを意識させるため、彼れの常識に向つて左の如く申渡すのである。

(一)おぎやーと生れた時の心靈狀態に歸りなさい、そして必ず自分の慾望や世間の人の情的觀念を出してはいけません、と云ふ事……精神狀態に稻荷だの神佛だのと云ふ先入觀念があつてはよくないから、悉く之れを脫却させて直に主人たる靈性を認めさせた方がよい。

(二)それから兩方の手をズツト術者の方に出させ、胸の邊より合掌を相方に開いた如くにして、その手に精神を統一させるのである。術者は無言のまゝ被術者後部に廻り頭の上に右の平手をピタとあてゝ「爲悅衆生故。現無量神力」と中音で十遍位連唱して居る內に、前に出して居る手がだん〳〵ピタと附くから、その時に……エイ……と一聲氣合をかけて双方の肩を後方より輕く叩くのである。

右の如くにして毎日一時間位づゝ誠心誠意に行へば必ず靈狐體現するのである。

(三)神通力と云ふても飛行機の如く飛んで歩くのではない、即ち神靈の擴大表現である、佛敎では天眼、天命、他心、神足、宿命を云ひ、漏神通を加へて六神通と云ふのである、天眼通とは靈狐のオ體を體現してから云ふ事で、禪定して雜念を統一してより得る心眼を云ふのである、此外六ケ敷い事が論じてあるけれども、要するに偉大の靈傳活躍を云ふより外に出ない。

第三の……靈狐の通力で自分の病氣も人の病氣も治すことが出來ると云ふ事は、六神通を體得した心境になるのであるから自他を救ふことが出來る樣になるのである、眼、耳、鼻、舌、身、意、の六根が昔の行者や信者の樣に狐精に魅化されぬ事である、即ち眞の心靈を認めて六根を淨め、六塵を拂ひ、六煩惱を去り、六法を念じ、六苦行をなし、六功德を修むると云ふのが靈個を認めだ刹那であると云ふ事を識るべきである。

第四の……靈狐實行以後はその秘を人に語らざる事……これは初心の者は靈狐の意義を識らぬからである。

第五の……靈狐實行の時刻は條文の如くであるから別に説明の要もあるまい。

第六の……靈狐實行は古き祈禱の概念は少しでも浮べては不成功に終る云々……は

誤れる古き祈禱の概念を浮べるときは、靈狐の眞價を傷くることになるから文字通り實行すればよいのである。

第七の……他から侵入したのでない事云々は

靈狐の口傳中尤も大切なるのは第七であるから、決して自體以外より靈が侵入するのでない事を徹底的に認めねばならぬ。……而して惡人誅伐の時は、毎晩二時頃に先方に靈狐の延長を行ふ樣にすれば、其効果は一層顯著である、それには先きに手紙を出して置くか、或は直接面して申渡し置くのである、即ち「君がそんなに解からなければ、當方でも精神的に於て君の靈性を動かすから、左樣に心得玉へ」と斷言して直ちに別れるのである。

即ち我が正を苦しめる時は、我の靈個が必ず延長して先方の心域にドシンと強き波動が往きて病氣になるか、失心狀態になるか、何等かの現象を示すのである、當方で默して居ても波動が往くことは確實なる實感である。今其一例を左に述べて見やう。

廣島縣賀茂郡に余の靈醫學研修の門人がある、或時惡漢に多大の金錢を踏倒されんとする時に、先方に往きて前の如き申渡しをして歸り來り、其夜より毎晩二時に起きて本人の姓名を書き、默念强禱した所が、三日目に先方の家族一同大苦痛を感じたので、直ちに來つて解決した事がある、債務者の名前を出してもよいが、他人の名譽を傷くることになるから特に秘する事にする。

無線電信の感ずる塔が略七百尺ある、地下水も七百尺掘り下げると噴水する、人間も心靈上には七識と云ふ惡覺妄想を起す惡靈がある、此の上に九識と云ふて最善の心靈があるが、此の心靈が七識と云ふ惡戯者を生捕にして仕舞へば、無線電信の電波が世界中に波動して往く樣に、九識心靈の本性の靈が、誰れにても感ずる事になるので

ある、七識が心靈本性に生捕になつて活動するのを……靈狐……と云ふので、心靈を忘れるか、心靈を無視して活動するのが、邪狐である、野狐であるのである。

地下水も七百尺下に往かなければ噴水にならぬのであるが、心靈も七識以上が常住の法體心靈であつて、即ち靈狐の生命である、だから神を凝らせば必ず通ずる事は確かである、然し不正は反つて先方に波動して往かないで當方に戻つて來るものである……人を祈れば穴二ッ……と云ふ確言があるが、惡人は第七識の活動であるから正の人の心靈の活動たる靈狐が延長して往つて、惡人の邪狐精を暗々裡に征伐して生捕り、降服さすれば茲に心機轉換をさせることが出來るのである。

靈狐法を行ふ時に、術者の記憶心象や、被術者の記憶心象中に、或る稲荷を信じたとか、又は人より稲荷の札を貰ふたとか云ふ事が、記憶に殘つて居るために、施法を行ふ場合その記憶が、偶然發作的に體現する事がある、之れが爲二重人格になつて一日でも四日でも心配する樣な事もあるが……然しそれは或は統一狀態になる準備である事もあるのである。

故に施法を行ふ前に、三日間位は能く教化をして本人の靈的慾求について審査を遂げねばいけない、突然行ふ事は靈狐の口傳を行ふ順序を缺いて居るのである、靈狐は人間の生命體の前に活動して居る心靈作用であるから、先づその本體に第一番に禮儀をせねばならぬ、それには一日なり二日なり本人を教化せねばならぬ、教化は即ち國王御幸の時の道掃除や下檢分と同じである、本人が心靈の意義をよく判つたら、それから行つて見るがよい、試驗をして見て其時身體に異變があつたら本人の心理狀態に質問して見るべし、必ずゾッと寒いやうな氣がするとか、熱くなるとか、振ひが來たとか、何んだか怖ろしくなつたとか、誰れか自分の側に据つて居る樣な氣がするとかどしんと背後より突やうな事があるとか、云ふたらそれは先入觀念がまごついて居るのであるから、こんな人はよく教化しさへすれば十四五回位で成功する。

術者が「爲悅衆生故現無量神力」と數遍唱して居る内に、被術者の耳根が次第に

遠くなつて、術者が下の方に居て、自分は拾丈も上に座して居る樣な觀念になるのが正式である、而して右の如き心靈狀態の時、ゾシンと身體が統一されて、眼耳鼻舌身意の六根が靈狐となる第七識に合一し、第八識の支配心靈役が一切を率ひて、心靈大生命に參加して、茲に始めて靈狐の活躍が定まるのである、……之れが正式であるが、此の境がないときは或は邪狐精の心理狀態になるかも知れないのであるから餘程注意せねばならぬ要件である。

然し敎化する時に、被術者の右の手なり左の手なりを術者の拇指と他の四本の指とで上下より挾み持ちながら(拇指を被術者の掌の處に當て、四本の指を手甲に置く樣にする)「爲悅衆生故現無量神力」と七八遍連唱して居る內に、被術者の身體がブルブル振ふて來るがそれは先入觀念がある爲めであるから、その試驗をしてから敎化してもよいのである。

又手を上下から受けて居る時突然被術者の大動脈からピクピクと脈波が來るのも先入觀念の迷信であるから、後で敎化することが肝要であるが、こんな人は剛情であつて、敎化を聞かぬ人が澤山にある故注意しなければならぬ、斯樣な人は眞個の靈狐使用者にはなり得ない者が多いのである、故に以上の如き人には靈狐など云ふことを言はずに「あなたの心靈を體現して拜謁したい」と云ふて座に着かしむるのである。

重ねて斷つて置くが、神靈が乘り移るとか、狐が憑いたとか云ふ既成宗敎信者が云ふ如き迷信觀念を放棄せねばいけない、少しでも此の觀念が殘つて居ると、靈狐は成功せないのである。

それから靈狐を體現させるのには、成るべく其室內は閑靜で且又何物も神佛の像など安置してない處がよい、怖畏の念の出ない樣にして、依賴心の起らぬ樣にするのである、被術者は無邪氣の者ほど體現が早い、然して劣等の靈狐は劇藥を呑んだ樣なものであるから必ずあとに害を殘すのであるが、最高級の靈が發した靈狐は、施法の度毎に氣持ちよくなるものである。

凡て靈狐法を行ふには無病健全の者がよい、成るべく女子がよいのである、男子は餘り落ち附がないから使用してはならぬ、又女子でも口のうるさい女子は使用せぬ方がよい、又花柳界の女子ならば半玉等の無邪氣な者がよい、相場師なれば拾六七歳の娘がよく、佛敎信者なれば禪宗の家の娘がよい、キリスト敎の信者なれば男でもよいが神の觀念を破壞してからでなければ宜しくない、然して病者に向つては靈狐法を行ふてはならぬ。

それから催眠術を行ふた人も駄目である、氣合術を行ふた人も駄目である、太靈術の靈子作用を行ふた人も駄目である、然し是等の人も其先入觀念を敎化して脫却して仕舞ふてからなれば非常に良好である、然して「爲悅衆生故現無量神力」と云ふ聖句の口調をよく練修せねばならぬ、音聲口調が順調でないと耳根を脫却させる事が出來ないからである、左の發音順にする事を練修せられよ。

「キーエッシニジョオーコ、グンムリョオーシンリキ」

此の發音は中音がよい、然して信者の經音では宜しくない、術者が唱ふるのである。

十二　靈狐は概して惡人を退ずる力あり

宗敎だの靈術だのあらゆる思想は惡人を善人とすると云ふより外にないのである、因果應報を說いた佛敎は因果の二法を除いたらば無となるのである。それに神道の如きキリスト敎は因果撥無の傾向があるから、宗敎としては價値はない樣であるが、それでも善惡は說いて居る、惟神の大道は神道の根本であるが、惟神の大道の中には、善惡共に神の意を體現すれば、究極には善惡不二となるのである、神と惡魔、佛と鬼ゴットと、サタン　悉く同じ意味であるが、唯惡人敎化の方法が種々異つて居り又巧拙があるのである、而して日本に於ける善人も、外國に行けば惡人となる事もあるし外國に於ける善人も日本に來て惡人となる事もある。即ち思想に依つて大なる相違を

生ずるのである。

又科學的に評定する惡人が精神的には善人となり、精神的には惡人で科學的には善人となる事もある、而して此の善惡なるものが、世界共通の惡となり善となるものは何であるか、眞の靈狐使用に依つて別れるのである、即ち靈狐使用の根本義は、惡人征伐にあるのであるから、研究すればする程益々其價値は大なるものである。

余の處に左の如き問題を質問に來た者がある、參考になると思らから左に記して置こう。(質問者の姓名は憚る所があるから秘して變名を用ふることにする)

茨城縣稻敷郡阿見村大字若栗　迷信愚連太郎君

(一)狐を使つて惡人を善化させる方法

(二)狐を使つて商業繁昌する事の大秘法

(三)自分の思ふ事を先方に狐の力で言はせる事

(四)狐を使つて人間各自の運命吉凶を言ひ當る事

(五)狐を使つて自分の思ふ女を引寄せる事

以上が可能なれば謝禮は何程でも致し候至急御回答を乞ふ。

こんな質問を僞瞞的の行者や坊さんが見ると、直ちに僞瞞的回答を與へて謝禮の澤山をせしめるのであるが、余は心王教と云ふ日本民族の中心思想を宣傳して居るから此の人に對して……心狐……を使用したらよいではないか、心狐とは人間に內在の心靈作用であるから自由自在に使用が出來る、と返答を與へてやつた、所が誠に不滿足らしく、却つて伏見稻荷や、最上稻荷や、豐川稻荷等の如き、僞瞞的の虛構說を說き與へるのが、金を出しても本望らしくであつたのである。

惡人は善人の對照であつて、釋迦に提婆、太子に守屋、國亂れて忠臣現れ、家不幸にして孝子出づ、とは千古の確言であるが、涙の忠、涙の孝は餘り望ましからぬ現象である、或る時代に左の如き討究があつた。

「孝は或る民族に限られたる病的現象なるか、將又人類に普遍なる現象なるか」

こんな學究的議論は今敢て關する所ではない、力の忠力の孝が遍く行はるれば初めて四海一家、和氣藹然として、社會主義も共產主義も無となるのである、然して力の忠孝は何によつて得らるゝか、靈個を認識させるより外に道はないのである。

惡人は概して利己主義が多い、母親と姉を救ひたいと云ふて盜賊を働くものもあるし、人を救ひたいと云ふて强盜に這入り遂に監獄に入れるものもある、又社會改造を主張して富豪から金を取り勝手氣儘の振舞をする社會滅却主義者もあれば、正義の戰ひだなど云ふて各自國の占領地を擴張する利己主義の國も地球上には澤山ある其他正義を主張しながら土民を虐待したり、他國を非道に苦しめたりする國もある、殊に甚だしきは無我愛主義者などは左の如き無謀な事さへ云つて居る。

「金は何程借り倒してもよい、借り倒してやれば金など貸す者はなくなる、人は殺しても差支はない、看よ自然は大仕掛けで人殺しをして居るではないか」

と云ふ矛盾した主張をして居るものさへある、然し自然の仕事は神靈の自由活動であるが、人間のする事は自然とは違ふ、そのなすことは凡て有意義であるから必ず害が殘されるのである、彼の大震災は民族の精神上の轉化向上のために來りし熱火の大洗禮でありしが如く、民族發展の一大使命を果す原動力となつたのである。

惡人が人を救ふと云ふのは、自分の心靈が惡因を滅却させる自由活動である、鼠小僧だとか小鼠吉五郎だとか云ふのは、善惡打算のをさせられたのである、之れを心靈の究極觀から研究すれば、善もなければ惡もないのである。

法華經の觀音經には「人非人の者を得度するには、人非人を現じて爲に法を說け」と云ふてある、之れを考へて見れば「氣狂を治すのには氣狂になれ」と云ふ事に當る思想を改善するには思想を以てせよ、と云ふのが確論である如く、罪人を審判するには、罪人に一念が發起した時の善惡に依つて眞理を發見する樣にしなければならぬ。

若し惡が重なり審判の方法に困る時には、之れを善化させる爲め惡人の手指の五指を仰向けにさして、術者でも審判者でも其五指を强く永く吹いて見れば、惡意識の出

發點が直ちに判明するのである。

五指を吹く前に罪人と目する者の右手の拇指と人指の間の處を、術者も同じ拇指と人指で押へて、本人の顏を凝視しながら「エイ」と一喝すると、額いにピンと通じて顏色が赤くなるか靑くなるであらう、赤くなるのは小心者にて自白も早いが。靑くなるのは大膽者で自白が遲い、而して次に手を出して見よと云ふて權威を整へ五指を吹いて見るのであるが、拇指が振動すれば實直なるものであるけれども、背景には老人が控へて居て罪惡を作らせて居ると見ねばならぬ。人指が振動すれば背景には父母系の者があつて働いて居ると見る、中指が振動すれば之れは自然的罪惡であるから先入觀念か思想問題を審判して見ると直ぐ判明する。藥指は非常に六ケ敷い指であるから、餘程注意をしないと罪惡系が判明しない、此の指振動するのは色情の爲めに發する罪もあれば、合同的罪惡の場合もある故其時の狀態によつて見分けねばならぬ。小指が振動すれば、之れは小心なる事が多い、けれども亦色情的女子の背景があるから、その如く審判して大に効果があるのである。小指と藥指と合した場合は將に色情關係の失敗より自暴自棄を起した罪惡と見てよろしい。

然し以上は惡人に相對しての方法であるが、若し直接惡人に面會して施法を行ふ事が出來ない場合は、日時を期して遠隔法を行ひて善化させるより外はないのである。遠隔法は前にも述べた如く先づ先方に手紙を以て左の如く命令を下すのである。

「君は社會の爲に罪惡を作るから、明日より一百日間君の生命は精神的に滅却させる」

然して術者は毎晩二時惡人の寫眞(寫眞がなければ姓名札でも宜し)を、人に知られざる樣に机の上に備へて、一時間位づゝそれに向つて念力を注入するのである、しかするときは、惡人と目さるものは必ず精神狀態に變化を來す樣になるは確實である。

然しながら術者の心が邪義であつては先方に直感さする事は出來ないのである。一殺多生と云ふ如く、國家のためにとか、社會のためにとか、團隊のためとか、對立の

正義のためにとか云ふ時には必ず効果を現はすものである、親の仇を果たさんとの一念は石に矢の立つ例もあるではないか。

余は常に人に壓迫される事はあるが、別に呪咀などした事はない。然し壓迫を加へたものは、突然急病を發して生命を奪はれし者が幾人もある。余は身不肖なりと雖も人類の幸福を計らんが爲めに、心王教を開基宣傳するものであるから、惡を以て壓迫を試みた先方の高潔なる心王は、余の心王と合一して惡なる不正は壓迫者を犠牲にして改過轉善の表本にしたのである。

（心王と云ふことは、心王宣傳書に詳記しあるが、眞の心靈と承知して居て貰へば大差はない）

そこで心王と心王との共通即ち心靈と心靈との共通……此の道理を自覺しさへすれば別に惡人として怒る必要もない「恨みに報ゆるに德を以てせよ」と云ふ事があるが、之れは實に眞理である、如何なる惡人でも必ず眞の心靈はあるから、當方が德を以て報ゆる熱情があれば、先方の心靈は、着々として惡なる精神狀態に變化を來たさしめて遮惡持善の目的を完成させる事は確實である。

キリスト敎などでも自分を信ずる者だけは善人と思ひ信ぜざる者は惡人と思ふから予盾がある。馬太傳に「カナンの婦基督に參り、其病を癒せん事を請ひたるに」基督曰く「我は愛する我兒のパンを奪ふて之れを犬畜生に與へず」と、其意はヘブリュー人は愛兒にてカナン人は犬畜生。と云ふのである、エスにして果して神なれば其靈力は無限であらねばならぬ、パンの如く有限ではないされば、何故に此の無限の靈力を吝んでカナンの婦を療法する事を拒みたるか……と云ふに是れラセロンの咎むる同胞なれば、之れを愛し異邦人は之を疎んじたるによるのであるが、實に寛仁正義の風を毒ずる者ではないか。

こんな思想が諸所に胚胎するから、惡思想や惡人が出たり、デモクラシーが主張されたりするのである。故に惡人と見たらば先方に手紙を出して於いてから、熱心に

毎夜二時を定めて靈個の延長擴大を行へば、如何なる惡人でも心氣轉じて自己の本性に歸る事が出來る。

斯くして惡人が無となれば國家に法律は必要なく、刑務所も裁判所も、宗教も必要を感じない事になるのである。

故に余は希望する、悉く眞の心靈を體現して惡人の一掃と共に、惡思想の擊退、人種の差別全廢と靈狐の權威認識、迷信雜亂の撲滅と、人心の向上發展に資せんことを。

十三　靈狐の口傳の奥傳

昔から日本にはシヤマイズムと云ふ神宣敎の樣なものがあつた、之れは滿洲、朝鮮方面で古い昔から行はれて居たのである日本では齊子と云ふて內親王方が行ふて居られたが、科學が普及されない時代には非道理な事も認められたのである。昔の人は左の如く云ふて居る。

「神の降臨を願ふに、神憑りをすべき人若くは憑依のものを出す人を、巫子、魅女、憑代と言ふのは、催眠術で云ふ被術者と同一であるし、又憑依の有る人其本人を被術者とする場合を直代と言ひ、他人を使用する場合を憑代亦は單に代人と言ふのである」

こんな事が惡習慣の傳說となつて靈狐の發展を妨げたのである、故に靈的研究に思ひ立つ者は必ず高山で行をすると云ふ事になつて人間の廢物たる……行者……肉體的不具者……亡國民族の坊主行者……などを出すのである。然るを虛構を設けて高山行中の出來事を傳へて人間の人格を無視するのである。

「法華の驗者が使用する木劍なるものは、元は天臺、眞言では、本式の祈禱となる と眞劍を用ひたものだが、夫れを滿行院が殺伐の氣風を厭ひ、四海備はれば木劍にても同じであるとなし、或時法敵の山伏を追ひ詰めた滿行院は、山伏が逃場を

失ひ大釜を破りて、サア切れるなら切つて見よと言つたから、滿行院が一聲叫んで木劍で切り込むと、釜諸共其山伏は見事腦天より唐竹割りとなつて相果てた、之れが滿行院の有名なる釜割りの木劍である」

と云ふ樣な虛構を說いて人心をチヤームした時代もあつたが、靈狐の口傳はこんな怪しい法ではないのである。

一體口傳と云ふものは面授口訣と云ふて、口から口に傳へるのであつて文字には書き現はす事は出來ぬと云ふのが、昔から傳へられた說で、昔の宗敎や劍道によくあつたのである、……一子相傳……などが即ち之れである、だから昔の祈禱などでは

「邪念があると、其邪念を障礙が利用するにより間違が生ずる事が度々ある」

と云ふ樣に何んでもかでも客觀的に見て居るのである、荒木又右衞門と柳生但馬守の眞影流の奧傳直授は、相方の氣と氣と合した刹那に直授したとの事であるが、口傳と云ふ文字は迷信を吸集するに都合のよい文字であるらしい事は日本民族の腦裡に泌み込んで居る先入觀念であるから、余も亦この口傳と云ふ語をかり出したのである。

口傳の內容

(一)變態心理と靈狐、幻覺錯覺と靈狐。

(二)憑依心象と靈狐、妖魔の惡戲と靈狐。

(三)神力、法力、行力、信力は別に必要でない事。

(四)靈狐は轉生說を非認し心靈以下を滅となす。

之をよく心得て置かねば靈狐の應用が出來ぬのであると云ふ事を識らねばならぬ。

變態心理は大本敎の出口直婆さんが始めて行つた樣に中村古峽さんは云ふて居るが天理敎のおみき婆さんでも、蓮門敎のみつ子婆さんでも、月讀敎の婆さんでも、悉く變態心理の發現したのである、本源の靈性に達せぬ者は左の如く云ふて居る。

「人體の憑依か、それとも狐狸の襲來か」

と云ふて狐狸が人心內に侵入して惡戲をなすと云ふ樣に誤信して居るから、變態性

のため靈狐を信ぜられぬのである、之れが嵩ずると幻覺となり錯覺となりて靈狐をそれと同じ物の樣に思ふから、靈個即ち靈の本體が見られぬのである。

憑依心象……靈狐の口傳中で最も注意すべきは憑依である、佛敎でも神道でもキリスト敎でも、既成宗敎の信者の心理は悉く憑依心象となつて居るから、靈狐體現者にするには、先づ一二週間試驗をせねばならぬ。

その試驗をするには、第十一の靈狐の使用法口傳中に記載してある如き方式を行ひ隔日に試驗する內には身體と心靈上に變化が生じて來る、此の變化か來るのは其質良好とは云はれないのである、一二週間行つても無事泰平何等變化のない穩健なるものは必ず成功する。

進んだり沈默したり變化して來るのは憑依心象强き爲であるから中止するがよい、靈狐體現は不成功に終るものである。

妖魔の惡戲と靈狐……變態性から憑依となり、次に妖魔の惡戲の感覺を起さしむるのが既成の宗敎などの誤りであつたのである、……アヲ向ふの雪の中に八大龍王が金色の姿を現はして走つて行く……などゝ云ふのが既に其意識は妖魔的に陷入つて居るのであつて、靈狐に遠ざかること幾千里だか知れないのである、こんな意識のものは養成しても駄目であるが、右の行爲の時突然エイと一喝壓迫を加へて見るがよい、さすれば跋扈して居る其意識は、中心の心靈に統一せられるから、本人はゾットして身振ひをする事がある。

神力、法力、行力、信力は靈狐使用には必要がない、古宗敎には必要としてあるが靈狐は最高の心理學の研究であるから、却つて邪魔となるのである。

又靈狐は轉生と云ふ事は絕對に否認するのである、轉生などゝ云ふのは、前生に於て善い事をしたから、今生には善良なる稻荷明神に生れ更つたのである、と云ふのがそれである、斯る迷信は絕對に禁せねばならぬ。

白狐が法華經を聽聞した爲に人間に生れたとか、或は狐が人間の處に嫁に往つて赤

兒を產んでから何處かに姿を隱した、などゝ云ふ虛構の話しは、靈狐研究には全然邪魔物である、故に以上四通りの道理を心得て置かぬと、自分で單獨に行ふても、他人に行つても迷境に陷入り易いから注意せねばならぬ。

◉口傳の奧傳とは

靈狐を體現して先入觀念が少しもなくとも、術者の方で、靈狐が御降りになつたなど云ふ迷謬があると、靈狐は體現せないのである、又國常立命だとか、鬼子母神の眷屬だとか、伏見稻荷の眷屬だとか云ふて開口したならば、絕對に中止して靈狐應用に使用してはいけない。

又靈狐體現の時、兩耳に外部の事が聞えてはいけない、眞に靈狐體現すれば耳も聞えなくなるのである、あらゆる意識を超越した絕對靈格の體現を示すのであるから、靈狐方式を行ふて後寒くなつたり、熱くなつたりして身體が振へるのは未だ靈狐の發現には少し時期が早いのである、こんな意識の人を靈狐體現に使用すれば、時に或はおさき狐だの、飯綱狐などゝ云ふ誤謬の體現になるから、斯る場合は絕對に中止した方がよいのである。

斷つて置くが、おさきだの、飯綱だの、くだ狐だのと云ふ傳說があるが、之れは傳說に魅化されて、傳說が傳說を生むのであつて、悉く催眠意識(潛在意識)の分裂作用であるから、よく〳〵心得て置かねばならぬ、決して他からヒヨコヒヨコ侵入して來るのではない、傳說暗示のために、おさき狐などが眼先に見へる樣に云ふのであつて、つまり心の弱き者ばかりが魅化されるのである。

こんな狀態があつたらば、家長たるべき者が誠心誠意に大喝一聲エイ、エイ、エイ、と三度位氣合をかけて見れば直に判明する、或は後方より術者の右平手を頭上にピタとあてゝ氣合を發すれば必ず手なり指なりを上に擧げるから、擧げたら双肩を輕く打つて中止せよ、手を擧げなければ分裂して居らぬ證據であつて、邪狐精や先入觀念がない純然たる心理狀態であるから、こんな人なら靈狐の活躍が出來るのである。

霊狐體現を自分で行はんとする時は、別に六ケ敷き方法を用ゆることはいらない、静なる室に坐して三十分乃至一時間位有ゆる先入觀念を脱却して、左の如き最高の觀念を連續させるのである。

人間の本生命……心王（眞の心靈のこと）

人間の活動心靈……第七識の末那即ち自我の本能。

人間の常の意識。

人間の觸官となる眼耳鼻舌身。

人間の活動心靈と常の意識の間に活動して居る何千萬と云ふ無數の潜在意識（潜閾狀態に於て活動する意識と同じ）が、あらゆる分裂した心靈に統合することを……

第八番目の阿賴耶識と云ふ、吸集役の心靈が、第七識の申し出でによつて憑依、憑靈、邪精狐等あらゆる靈的行爲を合併して、常の意識とも相談して觸官も合同させ第八識の阿賴耶識が、本生命の心王に參じて其命を受けてから活動意識が正式に活動するのが……靈狐であると云ふ事が眞實に認められたら、この觀念を連續して居る内に正靈が自由活動するのである、と云ふ。

この間の順序を心得ねばならぬのである、略して之を分解すれば。

正守護神……心王無意識の智力

副守護神……阿賴耶識集合大役

活動守護神……第七識末耶識

平守護神……第六常の意識

附屬活動神……眼耳鼻舌身

以上を合一して心靈と云ふのである、之れが分裂して活動するときが邪精狐となり、憑靈となるのである、此間の活動理を心得すれば、昔から流行して居る狐使ひとか、イチコとか、稲荷の託宣とか云ふ神靈境が徹底的に解つて僞瞞されぬ樣になる、而して眞の靈狐が認められて自由自在に豫言でも除病の力でも發揮する事が出來るので

ある。

「注意」

世間に稲荷や辨天及び七面明神が鍵と如意寶珠を持つて居るのは……心王（眞の心靈）の扉を開いて、中なる心王に拜謁するので、その準備の姿である。

燕石雜志一に「稲荷の社壇に置く木狐に玉と鍵とを銜たるは、稲倉魂のたまを象り、鍵はこの神五穀を主り給ふと云へば、倉廩を守る義を表する也」とは多少懷疑はあるが、心王を白米とし倉廩をアラヤ識となし、鍵を未那識となし、鍵にて開かんとするを五官六意識とするのである。

鍵をして心王の命に服さしむるは常識と阿賴耶心靈である、而して一切の心靈活躍が心王の許可に依つて末那識に集りて玆に……靈狐……の活動が開始されるのである

それから尙左の件に注意せねばならぬ。

爲悅衆生故、現無量神力、の聖句は即ち鍵であるから、この聖句を連唱されると未那識がどうしても活動して、恰も國粹團のやうに心王の嚴律に服從せねばならなくなるのである、此の間に起る相擊が即ち靈狐の發現準備として身體靈動となるのであつて、心身の維新となつてから、玆に始めて靈狐の自由活動を示す事となるのである。

十四　奥傳の雜錄

(一)單獨に靈狐即ち靈個の本體に合一したいと修行して二十一日間努力しても、尙充分に感受して來ないのは、先入觀念の迷信があるからである故、オブラートに左の聖句を七遍重ね書して水にて呑むがよい。……書くには清き筆を用ひて紅にて書くのである、而して呑むのは單獨法を行ふ一時間位前が宜しい。

「念念勿生疑」……これをオブラートの眞中に重ね書するのである。

(二)他人に施法を行ふた時、正しき靈狐體現でなく、怪しき現象を示したる時は、先づ被術者の双肩を術者の平手で輕く叩いて覺醒させ、然る後被術者の身體を試驗して

見るがよい、それは左の如き場所を驗するのである。

一、こめかみ。二、兩脇。三、耳の附根。四、片腹。五、胸。六、腕。七、腰。八、尻。九、背中

以上の場所を術者の中指にて輕く觸手して見るのである、此の時は被術者に閉目させて靜かになさしめ、術者も靜かにして三四五分間觸手して居ると被術者はビクリと患部に感ずるのである。感じたならば術者は時を移さず直ちに被術者に向つて、「ヱイ」と一喝氣合をかけねばならぬ、さうすると被術者の心靈は統一されるのである。

以上の如く觸手に依つてビクリとするのは、未だ被術者の先入觀念の迷信が脫却せざる證據なのである。

(三)單獨研究の場合でも、他人に施法を行ふ時でも、施法中何となく悲しき樣な心持がするのは、先入觀念のある證據であるから、先づ此の觀念を脫却しなければならぬ

それには單獨の際は先づ兩手の拇指を內にして其上を四本の指にて輕く握り締め、正座して兩膝の處に兩手をピタリと附けて下腹部に深呼吸を七八回行ひ直ちに「ヱイ、ヱイ、ヱイ」と三遍程氣合をかけるのである、さうすると以前の悲しき心象は無くなつて來る。而して此の法を行ふときは閉目してするのである。他人に施術する時、悲しくて涙の出る樣な被術者には失づ正座して閉目合掌させ、術者は後部に廻りて平手にて被術者の頭上にピタと觸手して左の句を三遍連唱するのである。

「樹甘露法雨。滅除煩惱焰」

右の句を三遍連唱したならば、直ちに「ヱイ」と一喝氣合をかくると涙の出るのは止まるのである若しこれにても尙止らぬ時は常識の時教化するがよろしい、心の底に悲觀して居る事があるために、靈狐に悲雲がかゝつて居るのであるから涙がこぼれるのである故、こんな人は一時的中止して三四日後再び行ふがよろしい。

(四)單獨修研中、合掌が放れなかつたり、頸を振つて來たり、身體が靈動して來たりす

るのは、靈狐が體現せんとする時と、邪狐精と心靈とが相擊する時とに起ることもあるから、此の場合は餘程注意せねばならぬのである。

又單獨でも被術者でも、非常に開口したき心の生ずるのは、先入主の迷信があるか又は被術者の肉身か、或は友人知人の死の刹那の觀念が、記臆心象にあるために、それが突放されんとする故に、開口したくてならぬのである。これは一應開口させてもよいけれども、一度不正確の開口をさせると後に害が殘つて二重人格の如きになることが度々あるから、開口させないやうに双肩を叩いて覺醒さする方が安全である。

(五)靈狐を體現せしめてから後に毎日その時間になると身體中何處か一ケ所痛むことがあるが、それは先入主の迷信が完全に脱却せぬ爲めであるから、單獨ならば自分の平手を以て其痛む患部にピタと當て、五分か十分左の句を默誦すればよろしい。

「心念不空過、能滅諸有苦」

必ず痛む處は消滅して快氣を催すのである、若し被術者であれば、右の如く術者の平手を以て被術者の患部に觸手してやればよろしいのである。

(六)單獨にて先方に我靈狐の直感をなさんとする時には、充づ「具足神通力、廣修智方便」……と云ふ句を書て之れを封じて無名にて送るのである、然して當方にては、毎夜二時に起きて三十分位その觀念を延張すべく熱心に默念するのである。さすれば先方の眼廓に必ず波動が直通して靈夢を見るのである、これ即ち「無思」虫が知らせると云ふ心理作用の實現である。

(七)單獨でも他人でも、靈狐法を行ひたるために狂態を現ずる樣な場合は、靜座させて「エイ、エイ、エイ」と三遍でも四遍でも氣合をかけて心内を鎮靜にさせるがよい。然又走りたがる樣な時は教化をして居る時、突然「エイ」と氣合をかけるのがよい。然し施法の第一日目に質の善惡を試驗してから、第二日目より行ふがよろしい、然らざれば失敗に終るから餘程注意をせなくてはならぬ。

(八)他の人が祈禱して昔の神係狀態や寄代の狀態や、憑靈狀態者を、靈狐者に使用せんとするには、先づ七日間位試驗せなければ突然使用してはいけない、突然使用すると、增上慢の狂態を演じて術者を困らせるから、先づ危險なるものとして一回丈試驗の上行ふて見るがよろしい。

(九)靈狐を研究する人は大に注意せねばならぬ要點があるから左に列記することにする

一、佛敎の一派であつて最も多く俗信を混じた喇麻敎では、種々荼枳尼天（即ち日本の稻荷と同じ鬼神の意義）を崇拜して居る信者と、日本の御嶽敎の雜亂信仰者や、眞言日蓮等の雜亂祈禱渴仰者や、天理敎や大本敎等の淫祠連は、靈狐と云ふ最高級心靈の發現狀態は、迚ても修得する事が出來ないから、こんな誤迷信の人には斷然中止して施法を行はぬがよろしい。

二、又催眠術や、靈子術や、氣合術や、其他流行して居る精神療法に溺醉して居る連中は、迚ても靈狐に到達する事は六ヶ數いから、之れも中止した方がよろしい

三又理性にのみ趨つて靈體を無視するハイカラ連中と、蠻カラ連中は同じく靈狐への到達が出來ないのであるから、之れも中止する方がよい、然し靈狐の意義に對して質問を求めて來る連中はまだ見込があるから、試驗的に一回施法して見るもよろしい。

それには先づ男は左、女は右の手を靜かに出させて仰向けになし、術者の掌の上に乘せて、被術者の指先きを力强く吹いて見るのである、……この吹き方は術者は息を深く臍下丹田（下腹部）に吹ひ込み、充分壓搾した息をフウと細く長く冷く强く指先に吹きかけるのである。……斯樣にして拇指から小指迄五本の指を强く吹くときは、何の指かがピクピク動き出すのであるが、（甚だしきは指が曲ることもある）拇指が動けば成功である、人指が動けば遲くも成功するが、中指が動けば不成功である。藥指が動けば疑心があるから實驗の上施せば成功する、小指が動けば充分なりとは云ひがたきも多少は成功する方である

(一)口傳の奥傳と云ふ事について會得するには鯛を食して見るがよい、必ず鯛の鯛がある鯛の骨をシャブルと鯛の鯛があると云ふことを認識するであらう、靈狐は鯛の全體ではないが、人間の身體の中心靈性である個在の眞靈を云ふのであつて、此の個在の眞靈は、鯛の鯛の生命であると云ふ事を認めれば、それが聽て鯛全體になつて活躍するのであると云ふ事が解れば、口傳の奥傳が解るのである。

(二)余が靈狐研究時代に、或時會員兩人が商業上の爭鬪のために大喧嘩をしたのである、其時余の母は靈狐發現の施法を行ふたのであるが、三寸位の火の玉がピシンと割れて兩人の間に展開した。それは喧嘩と云ふものゝ意味が一つの物を兩方で奪はんとする相對的であつたから、中心の靈性發露の研究のためには爭鬪は罪惡であると云ふ事を示されたらば兩人共閉目中頓首合掌して無言であつた。

(三)口傳と云ふ事は口から口に傳へるのであつて、文字の上に傳へるのではないが、文字がなければ口傳も活用せないのである。奥傳と云ふのは間髪を容れずと云ふのであるから、法式や儀式を超越した直感であらねばならぬ、故に面授口訣と云ふのである、例へば子供を生む事は、兩親よりの口傳を受けなくとも、人間を始め凡ての動植物は悉く知得して居るのである、これと同じく口傳も奥傳も文字を離れた刹那境の實感、實驗であつて文字には盡されないのである、然し實行してみれば茲に始めて實驗の價値は認められるのである。

(三)靈狐使用と云ふ事は、日本でば未だ曾て行つた人はないのであるから、始めての人には餘り信じられないであらうが、了解が出來ると非常に簡單で明確なるに驚くであろう。

靈狐は日本人が信ずる昔の神とは何等の關係もないのである、否關係がないのみならず昔のシャマイズム即ちシャマ教と云ふ神占教が、ヨーロッパ人にも行はれて居たのと、日本の昔に行つて居たのと密接の關係がある樣に思はれると云ふ人々が信じて居るシャマ教の根本を發揮して之を眞境に向上させる權威があるのである。

今シャマと云ふ事について少しく述べて見よう、これを說けば靈狐使用と神占とは大に異なつて居ることが瞭然と判明するのである、……シャマと云のは滿洲の昔、即ち女眞の時代に女の巫の事を云つたものである、それから言葉の意味が移つて、今の滿洲では神を代表させる杆を矢張りシャマと云ひ、又歐羅巴人がシャマイズムと云ふのはそれから取つた言葉であつて、即ちシャマの敎と云ふ事である、それでシャマ敎は女巫の敎へであつて神杆を立てゝ神を祭ることが特色とされてある。

然るに日本の昔でも其宗敎は矢張り女巫の宗敎であつた、多少の變化はあつたが矢張り滿洲のやうに神の杆を用ひたと思はれる形跡が無いでもない、……日本では昔の神主は多く女であつて、男の神主は至つて少なかつたやうである、それ故齋主を齊姫とも云ふて居た、中頃支那の文明を輸入したので、だんだん日本文明が支那流になつて來たが、それでも女巫の宗敎であつた時代の遺風として、其時代にも御巫と云ふのは女であつた、娘で神を祭る事が出來る資格者を採つたのである、祝と云ふのは神主のやうなものであるけれども、これも中世迄は女が多く、祝と禰宜とを一つの社に並べて置いたとさも、祝も禰宜も男より女の方が多かつた、中古でさへもこんな風であつたから、其昔は女が多く宗敎に携はつたことは勿論の事である、故に大昔は猿女君などと云ふて、女を以て神に仕へる事を職とした種族もあつた、皇室でも天照大神を祭り、大國魂神を祭るのは、皇女の御役であつた、神に仕へる女を巫と云ひ、男で神に仕へるものを男巫と云ふて居た、始めは神に仕へるのは女であつたから巫と云へば女性であることが分り、男は後に出來たから男の一字を冠して男巫としたのである。

「日本は始めは女巫の宗敎の國であつたと云ふ事が明白である」

女性が宗敎を掌るのは日本ばかりではない、琉球も昔から女巫が宗敎を掌つた國であるといふ事は支那人も書いて居るが、今日朝鮮の田舍などに行つて見ると、婆さんで吉凶禍福を說て居る巫の類がある、朝鮮の向ふの滿洲は今現に昔の通りシャマ

教がある、地理の上からいふと日本、朝鮮、滿洲、義古と續くことになるが、何れも女巫の世界であつた。

次に神杆の事は滿洲の神の杆は鈴は附けないが、滿洲でも神を祭るときは鈴を鳴らして祭り、又腰に鈴を附けて舞ひながら鳴らすのもある、又手に鈴を以て鳴しながら舞ふのもある。(日本の御神樂と同じやうに)

昔の朝鮮の事を書たものを見ると、昔ば朝鮮でも大きな木を立つて神を祭る習慣があつたといふ事で、其木には鈴を懸けて居たのである、或は又皷を懸けた事もある滿洲では杆を立てゝ神を祭り、鈴を振つて日本の御神樂と同じ樣な事をして居るのである。

斯樣に朝鮮も滿洲も、木を立てゝ神を祭り鈴を懸けたり振つたりする事は、同一風俗であるから朝鮮も滿洲より移入したものである事は明かである、日本で神を祭るに賢木と云ふ木を立て、其木に玉や鏡や木綿、麻の類を懸けて神を敬ふ意を表するのと、神杆を立てるのとは能く似通つて居る、故に昔より滿洲も朝鮮も日本も神を祭るに同一風俗であつたと言ふことが出來るのである。

これだけでは日本の信仰シヤマイズムと關係があつたと斷定は出來ぬが、歐羅巴の歷史家の研究する所によると、シヤマイズムは、古いのでも、新らしいのでも、又どんな所に行はれて居るのでも、凡て宇宙を三界に立て、說明するといふて居る、

一つは天、一つは地、一つは下界であつて、然してそれを掌る各々の神があると說いて居る、滿洲、蒙古のシヤマ教も矢張り同樣である。

天の國と地の國と黃泉國と此の三つを立てる日本の昔の神話を見ると、同じく三界が立つて居る、高天原といふのが天神の御在所、それから顯國、それは天が下ともいひ傳へるが地面の事である、即ち人の住む所である、それから地面の下の國を黃泉國とも、或は根之堅洲國とも、或は根國とも、底國とも言はれて居る、人が死んで其魂の天に往く事が出來ない者が其所に墮ちる、膿の沸て虫の流れて居る汚い

國だとしてある、殊におかしいのは、シヤマ教では下界の神は、一體は天の神であつたのだが、惡い事をしたので罰せられて下界に逐ひ下されたのであるといふ事を言ふて居る。

日本の黄泉國を掌る素盞嗚尊は天の神であつたのだが、過ちがあつて天上を逐出されて下界に落ちたと云ふことで、シヤマ教の說く所と全く同じである、殊に驚くのはシヤマ教では天神と云ふものは身を現はさない神で、即ち形を取つて現はれない隱身の神だと云ふて居る、日本の神も天神は隱身の神で、身體を現はさない神だと云ふ事は神話に書いてあるのである。

女巫の教であると云ふ事と、杆を立てると云ふ事とが同じで、三界を立てると云ふ事が又同じである、下界の神は過ちを犯して落ちた神だと云ふ事と、天神は隱身であると云ふ事が總てシヤマイズムも日本の神話と同じであるのみならず、日本と朝鮮、滿洲と蒙古とは隣同士で人類の往來も自由であつたと云ふ事を考へれば、日本の神の信仰は大陸のシヤマイズムと大關係の有ると云ふ事は疑ひない話しであると云ふ事が出來るのである。

シヤマイズムが日本にも行はれたとして考へて見ると、亞細亞大陸、朝鮮全島、それから日本島に、昔し拜まれた神の中には、屹度同じものがあつたに相違ないのである、……それは、宗教が大陸から半島に、半島から島に移つたと云ふ事が事實であれば、其宗教が奉じた神も矢張り同じ道を通つて日本に來たと云ふ事は、しかく信ぜらるべき筈である。

例へば太陽はシヤマイズムを信仰する人民は、何處のものでも拜んだもので、其働らきの偉大なることに依つて、宗教的崇拜の中心になつて居る、蒙古の大汗オクダイが、汗の位に即いたときに太陽を三度拜み、さうして諸酋長を其前に列べて誓約させたと云ふことがある。

それは蒙古に太陽崇拜の風習が有つたことを證明するに足るものであるが、朝鮮半

島の方でも、高麗でも、百濟でも祖先の神は太陽の子だと言つて居る、新羅でも日の神、月の神を拜んだと云ふ事が支那の古書に記されてある、して見ると朝鮮全島にも昔は太陽を拜む風があつた事は推定されるのである。

斯樣な風であつたから、日本では太陽を拜んで、さうして太陽は天の國即ち高天原を治むる一番貴い神であるとした事は、啻に日本に限つた信仰ばかりではなくて、昔は滿洲、蒙古、朝鮮全島を通じて拜まれたものであるらしい、此の外にも種々なる神の傳說はあるが、要するに太陽の神の意義さへ判明すれば、靈狐の本義と其口傳及使用法が昔のシャマ敎の遺傳とか燒直しとかでない事が判ればよいのである。

それから昔のシャマイズムが神憑と云ふことを大に行つたが、現代でも大本敎や、天理敎や、日蓮祈禱や、御嶽敎の降神、交靈の方法など之れと同じである、それは前にも澤山述た通り、神が人間に憑ると云ふ誤信から來たもので、神が人間に憑つて神の心を人に言はせると云ふのであるが、その方法は、……例せば女巫が襷をかけ、鬘を附け、或る一定の身形をして中の空の桶を伏せて、其桶の上に乘つて、ドン〳〵踏み鳴らして、何か演伎の樣な事をして居る間に、ボーッとして自分が自分を忘れると云ふ精神的狀態になる、さう云ふ時に神が其處に憑つて、いろ〳〵な事をさせるのだと誤信されて居るのである、これも神に託宣を求むる一つの方法であるが、單獨の場合であるから即ち自已催眠の狀態にあるのである。

又琴を彈いて神主たる女巫を失心狀態にさせて審神者が質問するのもある、此の外二三の方法があるが、要するに催眠的意識と常識とを統一させて、しかく演ずるものであるが、其當時は其意義が判明しなかつたのであるから、神が憑つたものと誤信されて居たのである、……靈狐は此の太陽崇拜を內面の眞靈に歸して、あらゆるシャマイズムを眞靈によつて覺醒せしめ、然る後其の活躍を認めさせるのである。

(四)昔の人が人間の精神に、二人以上の人格が、人間一人の心靈の中に宿つて居ると云ふ樣な事も云ふて居るのである、心靈研究や靈狐研究には注意すべき問題である、

人間の心の中には。

和―魂、荒―魂、幸―魂、奇―魂。

と云ふが如き、ヤサしい魂もあるし、恐ろしい魂もあるし、幸福を與へる魂もあるし、不思議な現象をなす魂もあるし、平和の時に現はれる魂もあるとしたのである然しながら佛敎で云ふ肉團心、緣慮心、集起心、實實心と同じてある、奇魂と云ふのが狐精などを示し、變態心理を示すのである、シャマイズムの女巫が體現するのも奇魂と云ふ催眠意識の分裂作用である。

此の四つの種類の上に、中心力の眞靈なる靈性を認めなければ、四種心象の活動の生命がないのである、シャマイズムは太陽崇拜で、自然を崇拜したのであるが、心靈科學の宣明に依つて其眞僞は一切氷解して仕舞ふのである、眞靈即ち余が宣傳する心王を認め得れば、八百萬神の意義も解することが出來るのである、即ち心王を認めた後の莊嚴なる犧牲の大精神の實行者が八百萬の神となるのが正解である。

さすればシャマイズムの落伍者がいちこと云ふ二重人格の活動も、靈個のポスター位と云ふ事に許して置いてもよい事になる、ダルウキンは「おれは餘り科學に心を寄せた結果、音樂だの美術だの詩賦だのを樂む事が出來なくなつた」と痛歎したと云ふけれども、現代人は宇宙絕對の心靈を識らざるのみならず、宇宙の美に驚かない、又自然の偉大なる力に驚歎せない、……實に鈍感、無神經になつたと云はねばならぬ、それに比べると、シャマイズムの大本敎や祈禱の寄代等のシャマイズムの墮落であつても靈を信ずると云ふ事は科學以上である、況んや昔のシャマイズムが自然を崇拜したのは、寧ろ彼等の心の健全を證するものである、自然は實に崇拜すべきものであつて、太陽は今でも深く考へると實に神々しいものである、彼の天の眞中から宇宙を照らす力を放射して、其溫熱に依つて萬物を化育して居る其偉大なる力は、思へば實に不思議である。

シャマイズムの昔の信者は、此の自然の偉大なる力を深く感じ、其力に强く動かさ

れて之れを崇拜したのであるから、決して無理ではない、釋迦も大ビルシャナ佛を自分の眞靈に比べて唯心論の確實なる佛敎を說かれたのである、日蓮はそれを實驗して斷頭場裡の活劇を示したのであるから、あらゆるシャマイズムが、太陽崇拜の完成を期待されたのである。

余が心王敎は個體に歸り、個體中の心王なる太陽を認めさせて、偉大、絕對を識らせてから直ちに擴大表現した太陽觀をなさしめるのである、然して日本民族が世界的に權威ある天照太神の日の神の崇拜……即ち心王の正式發展に稽首するのが精神的に一致すれば、國民思想が善處されると云ふ事になるから、それに歸趨さすべく靈狐……即ち靈個の口傳を敎述するのである。

(一五)眞靈なる靈個は……神の人と……云ふ事に氣がつけば萬事が了解せられるのである釋迦が出ると佛敎の信者は遂に之れを拜み崇むるの極み、彼を「佛陀」にしてしまひ、孔子の後に生れた者は孔子を人間の最上の模範とした、ヤソの門人もヤソをして「神なる人」として仕舞つた。

日本の古い神の話しに現はれた信仰の重要なる點は何であるかと云ふと、我々の國を治め玉ふた天皇を初め、其天皇に事へた所謂五部の長は、皆神であると云ふ信仰である、これは人を神として拜んだのである、即ち「ゴットマン」を信仰したのである。

此の信仰は佛敎の法華經に於て正解されたから日蓮がそれに加文した「日蓮は上行の再誕なり即ち我れは神なり」と云ふのである、神の子、神の人を向上させたのが日蓮であつて斷頭場裡の活劇がそれの實驗である、神の力、否、心王即ち眞靈の靈力試驗であつた。

人の事業の中に萬人の心を集めるのに足りるものがあれば、其事業は之を神業と云つて差支ないのである、今の世の中ではさう云ふ從順の心も敬虔の念もなくなつて仕舞つたから、さう云ふ事を輕蔑する樣になつたが、能く考へて見ると人の中に眞

靈の現れた神は常に働らいて居るのである、日蓮は斷頭場裡で、人間が作つた刄が頸に當る刹那に折れたと云ふ時に「日蓮が頭べに大覺世尊宿らせ給ふ昔も今も一同なり」と云つたのは、人と神とが合一して居る事を示したのである。

釋迦牟尼佛即毘盧舍那と云ふのも、慧日（即ち心王）が能く煩惱の若患を消除す、と云ふのも潜在意識即ち催眠的意識を心王（絶對心靈）の大智慧の水にて苦を起す煩惱の焔を消除するのである。

昔本多平八郎忠勝が或る戰場で非常に働いたのを、德川家康が稱讃して「今日は平八郎が働いたのではない、八幡大菩薩が現はれたものだ」と言はれたことがある、之れは皇室に對して矛盾した八幡大菩薩の譽め樣であるが、さう云ふ場合に「人を通じて神が働らく」とも云へる、一歩迷評すると「神が人の形を取つて働く」と云ふ事になる。

英雄崇拜心はこんな心より來るのであるが、靈個の口傳を心得體現すればこんな心理狀態で居る連中より大に進歩した、否、三千年前から心の謎を說く事の出來なかつた事が直ちに判明する事になる、さうすると現代思想を通じて世界的に靈個の思想が發揮する事になるのである。

靈狐口傳の奧傳の肝要な點は

(一)シヤマイズムの信じた太陽崇拜の向上。

(二)日本帝國を建設された至尊、それと共に働いた英雄豪傑を神として拜んだ古人の心裡の向上。

(三)佛敎の敎へた根本が絶對の眞靈である故靈狐の口傳は之れに歸着向上すること。

此の三大意義は日本民族が靈狐の口傳を研究するに就て必要條件である事を心得ておかれたい、之れが全部解るやうになれば、日本は世界一の權威者である、聽ては此の三大思想の合一した敎基、即ち余の宣傳する心王敎で、米國人の如き物質萬能利己主義者を敎導する事になるのである、先づ拾年前後即ち大正二十二三年頃にな

れば、米國も心王教に歸依して絶對の自由と平等を識る事になり、キリストなどの博愛などが無價値であつた事に氣附くであらう。

（心王教を玆に說くのは問題が異ふ樣であるが、然し靈個即ち靈狐は大關係ある心王の働らきであるかち雜錄を借りて記すのである）。

「心王は絶對にして宇宙を總該す」

との大人格を認める事になるのである、嘉永六年米國が日本を訪ふて門戸を叩いた爲に、日本は現下の進展をいたしたのである、然るに大正十三年七月一日の排日法案の實施は、將に日本をして東洋の盟主……大亞細亞民族心王總聯盟の組織を早めたのであつて、之れが實行の上は世界の四大民族に對抗して、亞細亞民族の靈威を認めさせるのである、米國の排日は、米國人の心王即ち眞靈が、日本に向つて一日も早く心靈的墮落せる米國人を救ふてもらいたいと云ふ要求である、と云ふ事を日本民族も未だ識るものはないであらう、之れを識るのは余輩一人である、米國の神學士淺原慈郎君は心王教に歸依して、これが宣傳の先覺者として大活動をして居るのである。

「敵國外冠なければ國常に滅ぶ」とは唐人の寢言ではない、靈狐の口傳は斯の如き問題をも解決するのであるから、個人の些々たる慾求や煩悶などは、解決するに何の雜作もなく直ちに出來るのである。

神通自在

靈狐使用の口傳（終）

附錄

靈狐はんだん家庭のたのしみ

靈狐はんだん家庭のたのしみは、靈狐の活動ぶりを證明するものである、人間の個在の靈性が無意識中に萬事の出來事を直感するのであつて、神を凝らし思ひを凝せば通せざる所なしと云ふのである。然し彼子が可愛から我物にしたい、彼奴が憎らしいから殺してやりたいでは、如何に手に印象を組み、口に眞言を唱へ、心は三摩地に住するとも能ふ可き道理はないのである、……なせないか……それは我慾だからである、なせ我慾は通せぬか、純一でないからである、なせ純一でなければ貫徹せないのか。

靈個心王の光る所無雜清淨ならざればなり……然らば我が願ふ所我慾は一も聞届けられないのか、そんなら靈に祈る必要もない筈であるが、然しこゝに一つの味方

がある……天道は正に與みす……と即ち之れである、故に我正の人不正に苦しめらるゝ時、我是の人、不是に傷けらるゝ時、一心不亂に其人を祟るのは必ず感應あるべき筈なのである。

人の爲めに、國の爲めに乃至無我無心に天下の神品を出さんがために神思を凝る、必ず其處に靈個の感應がなくてはならぬ、易者、靈覺者、千里眼等一切の靈的現象は皆此間の消息を語るものである。

科學の進歩は年々元素を增し、もう大概研究濟みと思ふ位であるが、心靈界の謎は一向に埒明かない。唯最も俗めいた「虫が知らせる」と云ふ一感應は世人がよく知る所であるが、是れは如何なる作用に因るのであるか、我が心の底の金線に觸るゝものがあるが如き知覺は、古來神占と稱する一種の磁氣作用ではあるまいか、靈狐はんだん家庭のたのしみは、是等の道理に依る人間個性の直感を致すの道を敎へるのである、論より證據先づ左の順序に依つて判斷を試みられよ、必ず的中疑ひなしである、

然し眞に的中させるには無念無想我慾を去つてせねばならぬ、心に野心を抱き又は雜念を漲らして行ふことは失敗に終ると承知せねばならぬ。

そこで判斷の方法を左に說くことにするが、左圖の如き圓形の圖を紙に書き「是好良藥今留在此」の八字を配するのである、然して中央の小穴に指針を附したる小さき棒を立て、圓形の占盤上にクルクル廻しながら左の經文を眼を閉ぢて數回默唱し約一分の後手を放すのである、しかするときは、中央に立てたる棒の指針は八字の內何れかを指して居るのである、その指したる字に依つて左記判斷の部にある該當の所を見て、其のを占はんとする項を見ればよいのである。

例へば願望を占はんとして、前記の指針が是の字を指して居たならば、判斷の部で是の部の願望を見ればよい、即ち「願ひ事は急ぐによろしからず、急がずとも必ず成就するなり、一四九の日に通達する」と云ふ事になる。若し又緣談を占はんとして、前述の方法により指針が好の字を指したとすれば、好の部の緣談の所を見ればよい。

即ち「金性と火性の者吉とす、木性と水性のものは和合せず、口舌爭論あるべし、緣談は十月十一月を吉とす」とある。以下凡て是れに準じて判斷を求むればよろしい。

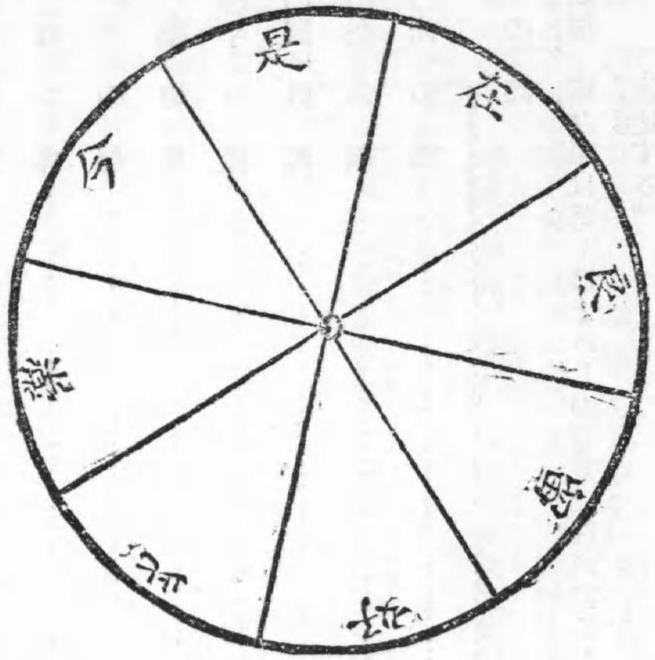
經文「ゼーコウリヨウヤクコンルーザイシー」

この經文を數回默唱して左圖の指針をクルクル廻すのである。

指針

……此指針を圓盤の中央なる小孔に立てること

占盤



上の占盤及指針はを適宜に造りて用ゐられよ

○是の部……一六〇頁
○好の部……一六四頁
○良の部……一六八頁
○藥の部……一七二頁
○今の部……一七五頁
○留の部……一七八頁
○在の部……一八二頁
○此の部……一八五頁

◉是の部

△願望　願ひ事は急ぐによろしからず、急がずとも必ず成就するなり、一四九の日通達する。

△進退　人事を盡して天命を俟、若し進退を決せんとせば小事は十五日前大事は八九月とす。

△賣買　株式、期米及び一切商況の氣配は騰貴すべし、されども人氣あまり高き時は安直を見て買ふべし、飛付買は禁物なり。

△病氣　肺病、頭痛、煩悶、熱病、不眠症は注意すべし、平日多慮多思なる性は病ひ重るべし。

△醫方　醫師は戌亥の老練家を吉とす、或は高臺に住居する老練の醫師か熟練の若い醫師吉。

△緣談　水性と土性の者吉とす、火性の者和合せず、木性の者は精力缺乏するなり緣談は八九月頃より十二月迄を吉とす。

△運命　運氣は幼少吉、中年苦勞多し、四十歲後大に吉運となる、されど商業の撰擇に依るなり。

△讀心　人と交際するに先方が剛情と知るべし、故に下手に出れば吉とす。

△方角　何事も戌亥即ち西北の間を吉とす、高き場所或は名勝の地を吉とす、混雜したる場所は運氣に妨げあるべし。

△失物　西北の間より高貴の人に依て發見せらるゝなり、或は目上の老翁等が見出すなり。

△勝負　必ず勝つ、されど焦つては負となる。

△人氣　人氣は非常に吉なり、神佛の利と云ふ意味なれば効驗あると云ふべし。

△姓名　姓名を赤子に附んとするには金傍を帶ぶる名をつけるを吉とす　或は土傍をも吉とす。

△天氣　天氣なり、されども朝曇る事あり、後晴天となる、出行は心配なし、夏は非常に暑し、又時としては雹降る事あれども直に天氣となる。

△走人　正月家出したる者は四月か八九月頃に歸るべし、西北の間より便あるなり。

△職業　適業は官吏、教育家、軍人、宗教家、醫師、高貴なる商工業吉なり、永遠の事業も吉とす。

△待人　一、四、九の日に來る。

△訴訟　永びく、早く進む時は損あり、長びけば必ず勝利となる、一切の掛合事は先方强き故讓歩して出づれば必ず成る。

△試驗　學業試驗は必ず成功すべし、急激なる進み方は注意、老人より助けを受るなり。

△旅行　遠き旅行は樂みあり、短期の旅行は途中難みあると知るべし、四月か九月前後の旅行は吉なり。

△人相　丸くして面に權威ある相なり、ベッタリした相、黑光りの相なり。

△住居　田舍の高き處か、市の閑靜なる處吉とす、公廟の如き邊もよし。

△食物　馬肉類、乾物の辛辣物、木果、乾肉骨多き物吉なり。

△數理　一、四、九、數理は絶對の零を意味す。

△色彩　大ひに赤し、玄黄、赤く光る、放光體。

△物體　鏡、鏡餅、滑かなる物、ベッタリした物。

△體質　肺、首、骨。

△貴賤　最貴なるは最卑となるを注意、最卑なるは最貴となるの喜びあり。

△有無　目に見えぬ理、又變化して消失したる意あり。

△射覆　老人が馬に乘りたる象、高貴な人が立ちたる象、仙人の變化自在を意味す即ち大悟徹底した釋迦の如き心靈の活動自由を意味するなり。

●好の部

△願望　願ひ事は獨力にて叶ひがたし、必ず識者の智恵をかりて成る、目上の婦人に力となる者あり。

△進退　迷ひやすきなり、利に迷ひ名に迷ひて爲めに進退決せられず、共同してなすを吉とす。

△賣買　株式諸商況は下落すべし、されど餘り始めより安き時は高値を待ちて賣るに利あり。

△病氣　腹病一切、脾胃病、食滯、晝輕くして夜重し、揚梅瘡、吐瀉、西南より醫師を賴むべし、人のために勞して患ふ、産安し、血の病あり。

△醫方　西南の間に住む女醫を賴むべし、若し女醫在らざるときは四十歳過ぎの老醫を吉とす。

△緣談　金性と火性の者吉とす、木性と水性のものは和合せず、口舌爭論あるべし緣談は十月十一月を吉とす。

△運命　運氣は幼少より中年迄吉とす、老年に至れば苦勞あり信仰すべし。

△讀心　先方は氣勢弱く何事も當方の自由なり、されど餘り侮りては反つて敗を取

る。

△方角　何事も未申の方を吉とす、平地にして繁華なる場所を大ひに吉とす。

△失物　西南の間の婦人の手に依つて發見せらるゝなり、或は目上の老婦が見出すべし。

△姓名　姓名は官音及び土姓を帶ぶ名を吉とす。

△天氣　陰氣にして曇り勝ちなり、霧氣あり、されども早朝霧非常にあれば陰の極變じて晴天となる。

△走人　常に秘密を以て婦人の處に隱れて居る、未申の方から家出したる日より十五日目か五十日目に便りあり、或は婦人同伴て來る事あり。

△職業　教官、農職、樂人、多人數集合の場所に出入する業吉、金物、火を扱ふ業八百屋等吉。

△待人　五、十の日に來る。

△訴訟　訴訟事は見合すべし、若し強てなせば必ず敗を取るなり、掛合事は萬事下手に出るか、極力上手に出る力にて成る、婦人を使用して掛合へば最も早し。

△試驗　學業試驗は西南に住する老練の師か、或は先輩に復習を受けて成功すべし。

△旅行　旅行に出れば方角に迷ふ事あり、されど後に利益を得る事あり。

△人相　四角の樣な相なり、而して面に權威なし、何處となく野卑の相あり、黑き顏なり、しみだらけの顏なり、鼻尖りたると鼻の先に黑子あり。

△住居　多人數の集る處吉、倉庫の近傍吉、村舍も吉、土藏の家吉、煉瓦の家吉、コンクリート建吉。

△勝負　先方が柔和の氣なれば勝つ、豪氣なれば負ける也。

△人氣　人氣は大に集る、されども餘り利益にならずと知るべし。

△食物　肉食吉、土中物、甘味、筍、野味、薯等吉。

△數理　五、八、十。

△色彩　黃又は黑。

△時期　夏と秋の間を推す。

△物體　必ずしも四角に泥むべからず、總て廉立ちて極りの附きたる意とす、天圓地方の說味ふべし、人の多數行列又は數多並べたる物の類、マバラの意、處々に模樣の有る物、又は小紋の類推すべし、袋物類、カバン、バスケット。

△體質　肉とす、胃、身、腹、脾。

△射覆　四角の物、柔かき物、絲綿、五穀、乘物、釜、瓦器、柄のある物、服、鞄梯子の類、据り能き物、空洞の物。

◉良の部

△願望　願ひ事は餘り急速にすれば聲あつて形なきが如し、三四月頃目的を立てたる願ひ事は必ず成る。

△進退　進退は萬事決斷にあり、人に動搖せられて自己も亦動搖すれは凶なり、精力を第一とし怒りを愼むべし。

△賣買　氣配は高く上り又下り又上り一定せず、値巾は三八の數を目的となすべし。

△病氣　震ひある病、狂者、癪氣、胸に衝上る症、精力絕ゆる事なき故全快早し。

△醫方　醫方は東方の元氣盛大なる三十歲臺の人を賴むべし、諸病に適す。

△緣談　水性と火性の者適す、金性は和合せず、土性は精氣缺乏す、緣談は三四月頃吉とす。

△運命　運氣は晩成なり、されど大概は中年の無理より晩成を得る者なし、中年大切なり。

△讀心　先方は怒氣を以て向ふ故、當方にても上に出て、掛合ふ如くすれば心の根本弱きなり。

△方角　東の方何事も吉とす。

△失物　東方の勞働者より出るなり、家中なれば長男の手或は番頭支配人より發見する。

△姓名　木偏を帶ぶる姓及び商角音を吉とす。

△天氣　冬は晴れ夏は雷氣あり、雨あれども直ちに天氣となる。

△走人　市場及び株式市場等に混入して居る、三四月頃歸る、三日か八日の朝發見す。

△職業　祭官、號令官、豫言者、郵便夫、勞働者、料理店及花柳界吉、水に緣ある商工業、火に緣ある仕事吉。

△待人　三、八、四の日に來る。

△訴訟　宗教上の觀念ある人を中に入れてなすべく、仲人が惡ければ損失あり、掛合事は精力家吉とす。

△試驗　學事試驗は決斷よき人に從つて復習すべし、始めは非常に成績よき樣なれど終りに注意せざれば結果惡しくなる。

△旅行　徒步旅行が非常に快なり、或は自轉車旅行面白味あり、永き旅中に驚く事あり注意。

△勝負　始め勝つたら中止すべし、後には敗を取るなり。

△人氣　人氣はパッと集つてあとなき雷の如くなり、人氣集つた時要心して財を蓄ふべし。

△人相　額角にして角あるが如き人相なり。

△住居　市內の繁華なる處吉。

△食物　山林の野味、野菜、果酸味、わらび、土筆の類吉。

△數理　八、三、四。
△時期　三四月頃とす。
△射覆　角あるもの、蓋なき虚器、寺鐘、布、車、電氣、弓、樂器、走る馬、龍、蛇、百足、善鳴馬、勇士、兩足並べたる象。

◉藥の部

△願望　願ひ事は神佛なれば七日間の四日目に叶ふ、人に賴む事なれば酒食を與へて成る、されど注意せざれば後に憂あり。
△進退　萬事目上の心の中に入り奴隷の如くして心に締りあれば成る、人をだます心を出せば進退に迷ひあり。進退非常に變化する性を注意。
△賣買　氣配は始め安くして後非常に上る。
△病氣　股の病、風疾、梅毒の類、癪氣、テンカン病、感冒、コウガン炎、女好き男好き病。
△醫方　南東の間に親切なる醫師あり、女醫者にても吉とす、行者の親切なる者も吉とす、氣が靜まる。
△緣談　再緣者とす、初緣は更り易し、水性火性の者吉、金性は和合せず、土性は精力缺乏す。
△運命　運氣は種々に變更す、されど運氣よき事度々あり、程よくすれば一生安穩なり、然し男は女の爲に損し、女は男のために害あり。
△讀心　先方は愛敬ありて交際上手なり、故に損害を注意する事。
△勝負　始めの出樣に依つて勝つ、先方の氣勢にはいれば勝つ、人より三倍利がある。
△人氣　人氣は人より三倍あり、金錢非常に集まるなり、集まれども亦散ずる事多し。

△方角　南東の間吉とす。
△失物　東方より南方にかけて美人の手より出る、俳優或は藝人の手より出る。
△姓名　木傍を帶ぶる姓名及び愛嬌ある名吉とす。
△天氣　雨なし、風ありて晴天なり。
△走人　藝妓の處か女郎屋、料理店等の手にて出る、辰巳の方に注意すべし、三十歳前後の婦人より發見す。
△職業　豫言者、教育家、際物商賣、八百屋、花園經營、飛行家、電車汽車運轉手等、帮間持吉。
△待人　三、八、四の日來る。
△訴訟　世相に通じたる人を中に入れゝば勝利あり、掛合事は親戚の中年婦人を介して吉。
△試驗　學事試驗は大ひに吉なり、されど女について試驗を失敗する事あり。
△旅行　女伴れ吉とす、然らざれば途中にて女難あり、永き旅行は女の盜難あり注意。
△食物　鳥肉、百禽肉、魚肉、野菜、酸味。
△數理　八、三、五。
△時期　三四月頃とす。
△色彩　青、綠。
△物體　女の立ちたる姿、三本足の五德の類、自轉車の類、色情狂の女のモデル像。
△射覆　鳥、禽類、寺、色情狂者、俳優、藝妓娼妓、仙人、白眼多き人、豫言者僧侶、魚。

◎今の部

△願望　願ひ事は心丈通ず即ち心願成就と云ふなり、物を得んとする願ひは非常なる苦心を要す、然して中途迄成る。

△進退　萬事先に人の爲になりてから自己の爲を計るべし、然れば必ず進退決する妙案出るなり。

△賣買　氣配始め非常に安ければ高値を賣るべし、されど大下落なれば注意せぬと損失あり。

△病氣　水氣、狗攣、心臟、腎虛、難産、惡寒、胃冷水瀉、血病、冷病。

△醫方　北の方によき醫あり。

△緣談　金性、木性の者吉とす、土性は和合せず、火性の者は精氣缺乏す、再緣の女吉。

△運命　運氣は苦心して開く晩年は吉なり、されど常に强情を注意せざれば世人に棄らるゝなり。

△讀心　先方は口の惡き者なれども心は潔白なり、始は惡口を云ふとも當方にて怒らず注意すべし。

△方角　北方乃至西倚りより丑寅倚りを吉とす。

△姓名　水傍即ち三ズイの姓名及羽音。

△失物　北方に隱しあり、若者の手より出づ、或は惡戯より隱したるならん。

△走人　不良少年及び無賴漢の仲間に居る、北方の知人より出る、或は同類のおだてあるべし。

△職業　金物、鑄物、陶器、官吏、支配人、大衆に使役せられ大衆を使役する商工業吉。

△勝負　勝負事は負るなり、されど人の後援あれば勝つ。

△人氣　人氣は餘りよろしからざれど金は集るなり。

△待人　一、六の日に來る、夜ならん。

△訴訟　中間に邪魔物ありて妨げをなす故、それを看破りて勝利となる。

△試驗　苦學生は必ず成功す、金錢豊かなるものは落第するなり。

△旅行　二人の女伴れ旅行大ひに吉なり、途中盗難あり注意すべし。

△食物　豚肉、酒、冷き物、酸い味、魚類、鹽物、吸ひ物、毒物注意、酢の物吉。

△數理　一、六。

△物體　天秤棒にてかつがれる象、凡て反りある物、シメク、リ畫像、鍔ある物、堅くして心多き木、刺ある木。

△天氣　雨、冬は雪。

△射覆　若物馬に乘る象、弓、釜の如き一切鍔あるもの、大勢に擁せられた象、扇の要、井戸、帶、水晶、盗人、熊、狐、鳥、馬、獸類、四足の一切。

●留の部

△願望　神佛に祈願する事必ず成る、南方の神佛を吉とする、人に依賴する事は南方の智識ある人に賴めば吉とす。

△進退　識者に從ひ進退すべし、南方に識者あり、時代の思想に通達した人を大ひに吉とす、必ず進退決す。

△賣買　氣配は上る、先に高値出づれば再び下りたる處を見て買方針勝利あり。

△病氣　發熱、飲食毒の鬱熱、心の患み、心臟、目の病、暑氣に中る。

△醫方　南方に尋ぬべし、眼病の醫師に名醫あり。

△緣談　金性は和合せず、されど奴隷の如き心を以て服從すれば吉、土性、木性は吉、水性は相互の苦心を致すなり、一生涯苦勞に終る。

△運命　運氣は中年前後吉なり、故に注意すべし、少年時代に大切にされた者は中年惡し、晩年吉なり。

△讀心　先方は識者なれば尊敬して交際すべし。

△方角　南方吉。

△姓名　火音及立心傍吉、微音も吉なり。

△失物　南方の高窓か識者の手にて發見するなり、發見する時間は眞晝即ち十二時前後なり。

△走人　學者の家に居る、南方の知人及び學生、學者、宗教家、本屋等に緣して尋ぬべし、夏土用中歸る、一寸出た者は二、三、七の日歸る。

△職業　土工、土に緣ある商賣、共同事業、會社經營、美術、書店等。

△待人　二、三、七の日來る、或は他に美女あるべし。

△訴訟　學者、神官、僧侶の仲介にて和合すべし、されども一度は斷じて獄と定めざれば調和せず。

△試驗　學事試驗は目上の識者に從ひ教習すべし、されど常に復習すれば成績善良なり。

△勝負　愛敬ある人なれば勝つ、或は對等の勝負ならん。

△天候　晴天、ひでりの事あり。

△人氣　人氣あり人に可愛がられる、金は充分はいらない、店先を賑かにする事を好む人。

△旅行　旅行は娘を同伴すべし、南方の旅行は利益あり、暑中の旅行特に快あり。

△食物　總て火にかけたる物吉、雉肉、龜、スッポン、蟹、螺、蛤、一切貝類。

△數理　二、三、七。

△色彩　合併した色、日光の如き光輝ある色。

△物體　文書の類、透しある物畫、甲冑の類、弓の的、南の寺、赤色物、花木、籠目の類、乾燥物。

△的覆　蓋ある物、貴き物、圓き物、書類、甲冑、旗、きぬ糸、窓に美女の立ちたる象、盲目の女、大腹の人即ちほていの類、電光、虹兒。

◉在の部

△願望　願ひ事は半ば叶ひ又破れ後叶ふなり、されども餘りに目先の慾に溺るれば資産を失ふ、人に願ひ神に願ふも半ばにて止むべし。

△進退　何事も止り勝ちなり、僧侶の指導を受けて吉、或は宗教上に熱心なる人に依つてなせば進退決す。

△賣買　氣配は高けれども大ひに持合ひの氣味あり、故に注意して賣買せざれば損あり。

△病氣　卒中風の身體不髓症を具へ大概治せず、長病、腕、手、腰の症、できもの、

△醫方　坊主の死靈、産は難む、歩行叶はぬ病、外は能く内惡し。

△緣談　北と東の間に善き醫師あり。

金性と火性の者吉とす、水性、木性は和合せず、宗教家の仲人なれば良き緣談あり、十月頃吉。

△運命　運命は二十歳より四十歳迄に成功するなり、されども各の性ある者は他より害を招く、僧侶の如きに心を持てば進歩して吉運と成る。

△讀心　先方は目先慾深き者故、その氣を呑んでかゝれば萬事成る。

△方角　北東の間吉とす。

△時期　土用、冬春の交だ。

△數理　五、七、十。

△色彩　黄。

△失物　北東の邊にあり、或は机の近傍にあり。

△走人　寺門或は山嶽の寺、墳墓番人の家等に居る、十月頃歸る、一寸出た者は五七、十の日に歸る。

△天候　曇り、曇り甚だしければ晴れる、概して曇る、半晴、雲あり、霧、嵐等時

にあり。

△職業　土工、學者、辯護士、僧侶、勞働者、金物、陶器、農事に縁ある業。

△待人　五、七、十の日に來る。

△訴訟　訴訟は中止するを吉とす、無理にすれば敗訴となる、掛合事も中止して先方より來るを待つべし。

△試驗　學事試驗は成功すれども中途にして慾のために女人の惑亂にあふ事あり、それに遇はざれば必ず大なる成功を致す。

△旅行　旅行は下僕を同伴するに吉なり、獨り旅行はだまされる事あり注意。

△食物　諸の獸肉、土中物、墓畔箏屬、野味、精進料理等。

△物體　珠數、石、机、果實、長き物、覆せたる皿器、本狹く末廣く、毛織物、貴物。

△勝負　勝負事は止るに吉なり、強てすれば損害あり。

△人氣　人氣は中吉なれど半ば面白からず、されど中也。

△射覆　坊主、山中の人、鼻高き人、手長き人、胸出たる人、指細き女の如き姿、狗、虎、鼠、百禽、黑き嘴ある鳥獸類、鼻嘴長き獸類。

◉此の部

△願望　願ひ事は始め叶ひがたし後に叶ふ、人に依頼したる望み事は大事業は八月に叶ふ、小事業は二、四、九の日叶ふ、金談等は女子及び妾に依て成る。

△進退　何事も辯舌にて述べ、而して一心に運動すれば進退決す、中途にして挫折する事あれば注意す可し。

△賣買　氣配は高く挫折す、秋は非常に暴落あり、毎日の氣配なれば朝高く晝頃安く午後持合安し。

△病氣　飲食の毒とす、邪熱、溜飲、せき、口の病氣。

△醫方　西の方に名醫あり、女醫最も吉とす。

△緣談　水性と土性の者吉とす、火性は和合せず、木性は精力缺乏す、されども心和合して信仰すれば返つて木性發展す。

△運命　運命は時々刻々挫折す、故に出發點を堅くして進退せば後成る、金錢をむだに支出するものはよき運命を開く事能はず。

△讀心　先方は精神時々變化する故能く呑み込みてなすべし、必ず思ひの儘なり。

△方角　西の方萬事吉なり。

△時期　秋、八月晩とす。

△姓名　商音、口を帶ぶる名、金字を傍とする姓名。

△失物　西方の書籍の中にあり、或は不淨物の中にあり。

△勝負　勝負はかけ聲一つなり、即ち言論の力を出すなり。

△人氣　人氣は辯舌好き者は必ず盛大なり、駄辯は失敗する。

△天候　大雨あり、夕立。

△數理　二、四、九。

△走人　少女或は妾か發見するなり、或は豫言者の知れるか、行者等の家に出入するなり。

△職業　及物、豫言者、樂器商、歌妓、廢物利用、金錢出納係、辯護士、演說家、活動辯士。

△待人　二、四、九の日來る。

△訴訟　訴訟事は善き辯護士に遇へば必ず勝利あり、掛合事は口利きを仲に入れて調和す。

△試驗　學事試驗は大海に衆寶がある如く、充分經驗して、蓄へ糸を出す如くだんだん出せば必ず成る、女人を注意すべし。

△旅行　旅行は秋を吉とす、常の旅行は遠近にかゝはらず途中金錢上に於て人より

苦情あり注意すべし。

△食物　羊肉、澤中物、辛辣物、他家にて馳走。

△射覆　羊、新月即ち三日月、星、娼、藝妓、澤の中の魚、口ある器、四角の器物及物、樂器。

△人相　銀光りの色ある顏、美男子、美人の相、子供らしい相。

以上は靈狐の口傳とは何等の關係がある譯けてはないが「是好良藥今留在此」の句に合せて獨りはんだんを家庭にて應用すれば非常に趣味がある故。附錄として載せたのである。

◉眼はんだん

△大きな眼は一般に觀察はうまいが、精密な事に注意が行届かない、但し是は瞭然した眼とは異つて聊か大き過ぎる眼を云ふのである。

△小さくて常に餘り開いて居ない眼は微細な事には能く氣が附くが、廣い一般の方面の觀察に缺ける事が多い、小さな眼の人に大事件を任かするな。

△深くくぼんだ眼は觀察精鋭にして物を觀るに徹底しなければ止まず、印象も確實である。

△常にまぶたで半ば蔽はれて居る樣な眼は確手たる信念がなく、明らかなる識見が乏しいので、兎角行動が一致しないのである。

△二重まぶたで細長い眼は、優しい正直な女であるが、意志が弱いので往々にして人に欺まされて不幸な運命に陷入る事が度々あるから要心せよ。

△少々茶色がかつた眼は何れかと云ふと哲理的の考察力に富んで居て決斷力がある但し人から冷靜な人と思はれ、眞の心から尊敬される事が少ないのである。

△黑い眼は情に激し易し、嫉妬深く又餘り陽氣でない、其代り情に激しても怒ることなく、直に涙で人の心を動かさんとする、いづれかといへば可憐な女である。

◎病氣の顔を見て生死を知る事

病者の面色異常を呈し、齒黑くなるものは、三十日を出でず死する也。

面に赤色を帶びて而も眼に黃色を發するは即時に死す。

小便して覺へず　唇　忽ち黑く變じて乾き、舌まき、兩肩の間ちゞむは皆死相なり。

いかなる病氣も鼻の下のくぼみに暗黑の氣あらはるれば危篤なりと知るべし。

口の邊より黑氣出で、耳に向ひて進むは七日前後に死す。

下唇の邊より腮にかけ、黑赤色或は黑青色あらはれ、光澤を失したるは毒藥を服したるか、又は藥違ひ等の證作とす、若し服藥せざるものは食毒にあたりたる兆なり。

重病危篤に陷入るも鼻頭に美色ありて光澤あるは死せず、朦氣のかゝりたる如くなるは必ず死す。

病輕きも黑氣の如き色、耳前又は眼邊或は鼻上に起りて小指の先にて水をつけて引きたる如くなりて口に向ひたるは遂に死を免かれず。

病者の面青黑色を帶び、枯れて光澤なく、人中反る者は三日の內を出でず死す相なり。

凡そ病者の足の裏腫れ身重く、大便持たず、瞳を轉せず、身體惡臭きは死病なり、まぶた落入目鼻耳に黑く面白く明かならずして囈言し、又は一向に言はず口卷き入る者、久病兩の頰赤き者、口を開き張り息すくむ者。面赤く眼白、面青く目黃み眼の光なし、始は面青く終口黑くなる、齒ぐき黑く人中のあとなし、唇青く身冷て痺れ尿す、手の內の皺なし、以上は悉く死相也。

◎神光ひとりはんだん

神光とは人間の魂の光りである、神佛の力を假ず、一切の人力を假らずして人間自

身の心靈の光明に依つて萬事を判斷するのである、然し誠心誠意に行はなければ光をはんだんする事が出來ぬから、熟練を要するのである、靈狐……即ち靈狐の放光であるから末節に記して一助とする。

先づ一室の電燈及びランプ等を消して一室に正座せよ、然して中指にて兩眼の眼尾を輕く押すやうにして打つのである、光りが輪になつてピカリピカリと閉目せる眼先に出る、而して其色

青きは驚きあり。

白きは憂あり。

黒きは大凶なり。

紫色は病氣永びくも治す。

紅黄は大吉とす。

赤きは逆上の兆。

光り見へざれば危うし。七日間に二日見ゆれば心氣消沈したのであるから養生すればよい。

先づ何事にも神光を利用して萬事進退すると、靈狐の口傳の使用法に並んで力强いのである、……概して紅黄色を萬事の大吉とするのである、病人は紅黄を認めれば近日に全治するから喜びあり、事業掛合事等一切紅黄なれば大吉報來るなり。

以上は能く的中するが、萬事熟練が第一である。

昭和十年十一月十一日　再版印刷
昭和十年十一月一日　發行

著作者　西村大觀
發行人　吉村藤作

靈狐使用口傳奥附
定價金壹圓五拾錢

著作權登錄
版權所有
不許複製

編輯發行兼印刷人　東京市神田區神保町三ノ十一　眞繼義太郎

發行所　心友社

發行所　東京市神田區神保町三丁目十一
日本佛教新聞社
電話九段三八一一番
振替東京五九三四五番

終